

# 白露日記

山口 慎

現代語訳・上野真理子

## 目次

まえがき

二

### 白露日記

ペルー行きを決断

三

海路ペルーへ

四

ペルー到着

九

アンデス越え

一〇

カラワクラ鉱山に着任

一二

カラワクラ鉱山の生活状況

一六

事態急転

一六

坑夫とペルー人との喧嘩

一八

高橋是清委員長の帰国

一九

ヤウリ騒動

二一

病臥する

二四

アンデスを去る

二九

事業失敗の原因

三三

乗船、帰途につく

三三

帰国

三七

あとがき

三九

山口慎は私の母方の曾祖父で、一八四六（弘化三）年八月二十九日、上田城下に代々の上田藩士・山口毅（号は玄山、幕末まで通称平太郎）の次男として生まれました。一八六八年、二十三才から藩命により幕府の学問所である神田湯島の昌平齋で学びます。維新後は権代参事職であった山口玄山は明治四年、翌年にアメリカ留学を控えた上田藩最後の藩主・松平忠礼と弟の忠厚の御修行御供を命じられますが、病気のため退職隠居し、息子の慎に役目を継がせました。二十六才の慎は兄弟公と年齢も近く、文武両道であったので用心棒の意味合いもあつたでしょう。洋行に備え牛乳や牛肉に慣れる練習もして、一八七二年（明治五年）松平忠礼と忠厚のアメリカ留学に随行し、東海岸のニュージャージー州ラトガース大学グラマースクールで共に学びます。しかし一八七五（明治八）年、父玄山の死去による家督相続のためか、松平兄弟より早く帰国しました。

忠礼はラトガース大学を卒業し一八七九年に帰国しますが、弟・忠厚はその出発の直前に遁走し、アメリカ人の恋人カリー・サン普森と結婚してしまいます。忠厚は旗本の塩崎松平家を継いでおり、すでに妻がいました。忠礼は激怒して絶縁を宣言、慎は間に入り、忠厚と度々書簡をやり取りし送金などの面でも苦心しています。これらの書簡四通は現在、上田市立博物館に収蔵されています。アメリカに留まる道を選んだ忠厚は、土木建築を学び土木技師として働きました。ニューヨークのブルックリン橋の建設工事やユニオン・パシフィック鉄道の主任技師として活躍、測量機器の発明もして各地で新聞を賑わすほどの大活躍をします。しかし結核を患い、コロラド州デンバーで三十六歳の若さで死去しました。

それは一八八八（明治二十一）年のこと、つまり山口慎のペルー行きの前年のことでした。慎はこの『白露日記』の中で、船がサンフランシスコに着いた折、忠厚に思いを馳せ遥拝しています。

アメリカから帰国後の慎は、官立東京英語学校の教員をしていました。その時に同僚として、後に日本を代表する財政家となる高橋是清（これきよ）と知り合います。是清は慎より八才年下でしたが、十三才で一年間アメリカへ渡って苦労し、明治維新の年に帰国、その後は佐賀県唐津の英語学校でも教えていました。酒好きでもある二人は大変気が合ったようで、是清は自分の結婚の直後に、唐津藩の家老・友常典膳（ともつね）の娘お泰（おちか）を慎に紹介し、仲人もしました。それ以前から慎は東京赤坂で共同経営者として「桜田麦酒会社」に参加し、日本初期の国産ビールの製造を始めていました。一八七七（明治十）年に銀座に開店した西洋酒問屋「清水谷商会（しみずたに）」は大変繁盛し、是清の酒蔵でもあつたようです。また輸入タバコを扱う「山口屋」も銀座四丁目に構え、商売は順調でありました。

そして明治二十二年、殖産興業を目指す日本において初の大型海外進出となるペルー銀山開発事業が計画され、慎と是清にとっては人生を変える大きな出来事となるペルー銀山行き、この『白露日記』へとつながっていくのです。慎が精魂込めて清書し伝えようとしたこの波乱の日記は、明治時代の貴重な記録でもあり、子孫たち若い世代にも読みやすいようにと拙いですが、原文の言葉を残しつつ現代語訳を試みました。

はくろ

## 白露日記

(秘魯日記)

山口 慎

### ペルー行きを決断

明治二十二年(一八八九)、四十四才の私は、東京京橋区尾張町に西洋酒問屋を営んで既に十二年になっていた。衣食足り、五男三女を設け家族繁栄ではあるが、しかし、ただこのまま老いていくのは最も本意ではないと思っていた時であった。

明治五年に初めて米国へ行った際の友人の一人である大倉喜八郎氏から、

「札幌麦酒会社へ三年ほど行ってくれないか」

と話があった。この度ドイツ人の技師を雇い入れるので私にその監督をしてほしいという。大分話も進み、明日は委員長の渋沢栄一氏のところへ同行し、面会の上取り決めたいとのことになっていた。

が、時を同じくして「日秘鉱業会社」というものが立ち上がったのである。日本側は藤村紫朗しろう、高橋是清しげよ氏らをはじめ、紳士紳商といわれる政財界の名士二十五人で五十万円を出し、ペルー側はドイツ人ヘーレン氏が五十万円を出し、合計百万円の資本で同国の銀山を開掘するという。そのため、私の知り合いである高橋是清君が委員長として出張するというのである。この一行と共に行ってはどうだろうかという問題に接し、即時に去就を決めざるを得ない事態となった。(注・原本では資本金額は空欄。後に確認しようとしたのだろう。)

そこで私は考えた。札幌行きの仕事は今日まで自分がやってきたものと同様のものであり、殊に北海道へ行ったからといって、格別心身にとり有益とも思えない。ペルー行きは、その仕事があるいは盛大に発展する可能性があるだけでなく、初めて行く国ゆえに見学することでの利益も多々あるにちがいない。殊に、皇国日本の現在の状況は沈静で、大いに国力を世界に発展しようという気概が見られない。もしもこのペルー行きが万一、計画通りに上手くいかないことがあったとしても、先ずはこれらの衆を率いてこの事業を遙か遠い海外の国で試みたならば、将来またその志を継ぐ者が出て、大いに国威を海外に拡張するという端緒となるかもしれない。そう考えて私は俄然志を決し、札幌の方はこれを断り、ペルー行きと決断した次第である。

世の中よ ためしぞ事の始めなれ 成るも成らぬも亦またくのため

こうして、ペルーに在留することになる高橋委員長は、すでに一度当該の鉱山の検査を遂げて一旦帰国していた技師の田島晴雄と共に、明治二十二年十一月、ペルーへ向かった。

その出発にあたり、私は藤村委員長より左の命を受けた。

- ・この度はペルー国カラワクラ鉱山試掘のため、鉱山技手、坑夫、大工、人夫等合計十七人を送るにつき、彼等を監督してペルーに連れて行く事。
- ・試掘をして好結果が出た場合は更に数千人を送る可能性もあり、今後の予算を立てるため、北米のサンフランシスコに着いた際には、船舶の割引等を交渉する事。
- ・ペルーで家屋を建築することも考え、その材料相場を道中で調べる事。
- ・ペルーに着き彼らを先方へ引き渡した後は、この鉱山事業に付帯する農商工関連の事を十分に視察し、一度帰国する事。

こう決まり、私はいよいよ荷物を整え、同年十二月三日、当該十七人を引率して横浜より米国汽船ベルジック号で出帆した。

ちなみに記すが、私は老母にかつて、「三年男」と戒められたことがあった。それ以来、仕事の変更はするまいと思ひ、尾張町で現在の洋酒問屋を営んでからは今日に至るまで動かなかつた。しかし四方の志注・国外へ出て活躍したいという志は勃然として抑えがたく、遂にこの度の決心をしたのだが、老母の思召しはいかがかと案じつつ許可を求めたところ、快諾されたのである。

たらちねの母の心のたけきさに 八重の潮路もいさみてぞゆく

## 海路。ペルーへ

私が率いることになったこの一行は、皆若くて血氣盛んな者たちばかり、ややもすればすぐに腕力に訴えたがる様子であつた。そこで私は独り心に決めたのである。我らの一行は元より少人数なのだから、いかなる場合といえども決して腕力を出させることなく、ひたすら誠意をもつて万難を排除すべしと。

ところが、横浜出帆を目前にして大工職の久万勇六が黄色い袋に入った棒状のものを持っている。

「それは何だ？」と私が怪しんで聞くと、

「護身用の刀だ」という。

「これから営利事業に赴くというのに、刀剣は無用だ！」と、その刀を置いていかせた。

またこの一行は、生まれてからずっと鉱山で暮らしてきた者はじめ労働者ばかりであり、いままで洋服を着たことのある者も少ない。もちろん、横文字などを読める者などいないから、一步国を離れた以上は言語をはじめ、日常生活や荷物の世話に至るまで、全て私人の責務となるわけで、さてさて容易なことではない。そうはいっても、彼等には初めての海外旅行であり、何事も心配なのは無理もないことである。そこで彼等を慰め勇気づけようと、以前私が渡航した際には海上はとても穏やかだったので、

「この太平洋はその名の通り、至って平和の海で、決して風波のために苦しむようなことはないから、皆も安心して大丈夫だ」と話してやった。

乗船後、私と小池技手は上甲板の部屋に入り、その他の者たちはみな下層の部屋に雑居することになった。しばらくして、船が房州岬をまわる頃から北風が猛烈に吹きすさみ始め、加えて雪も降ってきた。その気象は実に凄まじく、船体は大きく動揺し、みな生きた心地もしないほどとなった。

雪風に真帆あげむ けふあづまなだ 心もひろき大丈夫のたび  
あづまなだ里潮の浪し高ければ いつか見うせし富士の白雪

凍風浙瀝送扁舟 知是黒潮万里流  
浪鼓硝窓人未睡 一輪大月照皇州

(読み) 凍風の浙瀝、扁舟を送る

注・浙瀝：雨雪の音

是、黒潮万里の流れと知る

扁舟：小舟

浪硝窓を鼓ち、人未だ睡らず

硝窓：ガラス窓

一輪の大月皇州を照らすらん

皇州：日本

船が進むにつれ、山のような怒濤が上甲板に注ぎ続け、一メートルほどの高さに溢れかえった。即ち、水深一メートルの急流に逆行しているようなものだ。私たちは「これはきつと針路を誤って、どこか違う方向に吹き流されているに違いない。とても予定通りの期間で米国に着くことは叶わないのではなからうか」と考えた。むしろ新しい島にでも衝きあたれば、それも一興などと妄想をしていた。

この大荒れの中、チーフメイト(一等航海士)は、凜烈なる寒風、澎湃たる怒濤を侵してズボンまくを捲り上げ、甲板上を縦横に走り回って働いた。そして寒さに耐えきれなくなると、時々私の部屋に来てブランデー等をねだった。彼にしてやれることがあるなら一番の義務と思ひ、私は丁重にもてなした。彼は、一杯飲んで酔った勢いで飛び出してまた懸命に働く、ということをや遂に四昼夜も繰り返したのである。

私の部屋は十八人分の飲食物をすべて保管する倉庫とでもいうべき所で、酒、味噌、砂糖、醤油その他の日用品を収めていたが、扉を締めてあるにもかかわらずその隙間から潮水が入りこみ、室内は急雨が降ったごとく、やはり深さ一メートルのタンクのような状態となった。そのうえ船体が動揺するため、保存していた物品はぶつかり合って倒れる。瓶詰の酒、麦酒、ブランデー、醤油等が尽く破裂し、これに砂糖、味噌、菓子等も混ざり、まさに滅茶滅茶めっちゃめっちゃとなつてしまった。あまりの嘆かわしさに、せめて酒類だけでも救おうと、寝台から手を伸ばして取り上げようとした瞬間に船体が震動し、その全てが混交して溜った液体の中へ、私は真逆さまに落ち込んだ。

「これはかなわん！」と直ぐに飛び起き、寝台へ戻って必死に捉まりながら、もはや成り行きに任せるしかないと思つた。

冬の夜のながきも知らず旅枕 君と母との夢のうきふね

こうした四昼夜の後は、風も止み波も穏やかになり一同安堵した。が、風浪怒号の最中には、「山口さんは実に我らを騙したな」と怨んだ者もあったという。私とて神ではなし、いかんともなす術はない。

それ以降はいい天気が続き、あと三日ばかりでサンフランシスコへ着くというある夜、月も落ち、人も落ち着いたという頃、急に下層で大騒ぎが起きた。ボーイやコック等の中国人たちが、まるで怨み泣くような悲鳴をあげ、ドラを打ち叩きながら東西に走り回っている。いったい何事か行ってみると、下層に同居している日本人と清国人およそ百人が総立ちになって格闘しているではないか。私が鎮めようとしても到底見込みはないようなので、直ぐにチーフメイトに伝え、

「君に一任するから、どうかこの騒ぎを鎮静してくれないか」と頼んだ。彼は鎮めてすぐその場に駆けつけ、難なくこれを取り鎮めてくれた。

そもそもこの騒ぎの起こりはこうである。

清国人の数十名は下層の平面部分を占領しており、習慣として乗船するとすぐにコック等と交渉し、飲食と日常生活の自由を得るのにひきかえ、日本人は皆、棚式のベッドに雑居しており、飲食は中国人のコックのあてがいぶちである。副食物といっても梅干や沢庵漬くらいで、わずかに飢えを凌ぐばかりの非常に面白くない境遇であった。そればかりでなく、清国人たちは日々かわるがわる長い弁髪とんびの豚尾を束ねるので、あちこちに毛髪を飛び散らす。潔癖な日本人に迷惑をかけることなど全く気にもかけない。その横暴きわまりない有様に、一人の日本人が半激半戯で、眠っていた清国人たちの豚尾の両方を柱にしっかりと結び付けた。何も知らずに起き上がった彼らは、頭髪を根元から引き抜かれるほどの苦痛に、船内に響き渡るほどの喚声を上げた。それで先の大活劇が演じられたのである。

彼等は、たまたま側に居合わせた日本人の仕業とばかり思い込んで短気にもその者を殴打したが、これは加害者ではなかったため大変に怒り、殴り合いとなった。そこへ双方の味方が加わって器物を打ち破り、誰彼の区別もない烈しい殴り合いになった。ある日本人は太刀を抜いて切り掛かろうとし、日本人の仲間が後ろから抱きとめるという、今一瞬の危ない場面もあった。このため私は船員たちに嚴重注意し、これからは区画を決めて互いに侵さないこととし、その後は静かになった。

いよいよ明日はサンフランシスコ港に着く。そのとき一同が見苦しくないようにと、小池に命じて皆、身体を清潔にして衣服を整え、一度正装して甲板上に整列させようとした。が、小池は自分の配下の坑夫が多いことを理由に私の命令に従わない。私は憤ってこう言った。

「君たちは初めて他国を訪れるのだから、その習慣を知らないで人々の笑いものになっては気の毒だと思っからこそ、今点検しておこうというのに、我儘わがままな振る舞いをするなら勝手に行動しろ。私はもう一切、個人についての世話はしない！」

このとき、同室で聞いていた起立工商会社（注・国策による日本製工芸品の輸出会社）のニューヨーク支店員・牛島氏が、

「君、もし山口君の命令に従わないと一同は大変困ることになるだろうよ」と注意した。

小池は驚いて立ち上がり、すぐに命令を伝えた。そして、皆正装して甲板に出て私の点検を受け、あまり笑われることもなく上陸することができた。なぜ私がこのような令を出したのかというと、坑夫たちが乗船前に東京の上野を見物した時、こんな笑話を聞いていたからだ。

「ある一人が、小便しようとしたがズボンに穴がなくてできなかった、というので見ると、彼はズボンを後ろ前に穿いていたよ！」

十二月十八日、好天気。船が静かにサンフランシスコの金門港に近づいたときの一同の歡び方は何とも言いようがない。その明媚な丘陵、豪壮な建築物を望み見て、皆肝を潰し、

「ああ、こんな美しい所なら、かかあ(妻)をも連れて来れば良かった！」などと口々に歎賞した。

本日は日本を出帆してちょうど十六日目、即ち予定通りである。いかに船長始め、船員一同が熟練した技量を持っているかに感服する。もともとチーフメイトは、

「私は日米間の航海をしてすでに十八年以上になるが、今回のような大風波には今まで出合ったことがない」と言った。それほどこの航海の苦勞は猛烈であつたと察するに余りある。

船は汽笛を鳴らしてサンフランシスコ港の棧橋に横付けとなつた。以前私が寄宿させてもらった当領事館書記官・早川鉄治をはじめ、館員たちが私たち一行を迎え万事の世話をしてくれる。私と小池はコスモポリタン・ホテルに宿し、その他は皆日本人の下宿屋に宿をとる。乗り継ぎの便船を待つて数日留まるため、一同あちこちを見物する。市街は切石を敷き詰めてあり、ケーブルカーが縦横に走っている。

遙かに松平忠厚公の靈を弔い奉る

アメリカや みなとの関は閑ささねど わがおもふ人の帰る日はなし

私は領事館が雇っているリチャードソン氏に頼み、共に汽船会社へ行って汽船賃の将来の割引等の談判をし、また木材商に相場を聞き、かつ運送方法についての交渉を行った。当時の領事は川北陸軍少佐である。私があることがブドウ酒醸造家の長沢鼎氏に通じたようで、長沢氏は私を迎え、ブドウ酒の販路についての交渉もあつた。(注・長沢鼎は一八六五年、薩摩藩が英国へ送つた留学生の一人。六七年にアメリカへ渡り、後にカリフォルニアでワイン王と呼ばれた。)

十二月二十三日、パナマ行きシテイ・オブ・シドニー号でサンフランシスコを出発。天候は險悪である。先ず船内での一同の場所を決めたが、自分の居場所はなく、やむを得ず甲板上の石油樽の上に大の字になる。天を仰いで放吟していたが、風波、非常に激しい。船は南北に長いカリフォルニア州に沿って行くこと数日。その間に、私はたまたま実に良き友人を得た。彼はサンフランシスコの鉾山技師だが自ら採掘をする人で、今回、中央アメリカのコロンビアの鉾山に雇われて行くという。日々親密に話をするうち、私がペルーへ行くという件を大いに氣遣い、

「それは止めてはどうだ」と忠告した。私は、

「自分の資金を出して行く事業ではなく、今回特に雇われてこの者たちを連れて行き、先方の会社へ引渡し、その後はこれこれの用件を為して一度帰国するのだよ」と説明すると、彼は安心したように言った。

「それならばやむを得ない次第だな」

「どうして君は僕のペルー行きを危険というのか？」と私はたずねた。

「ペルーという国の人は概して短気で、直ぐに怒る。かと思えば直ぐに仲直りするといった、いわゆるバッド・テンパー』の人たちだから信用することができない。何事によれ、例えば政府と契約を結んだとしても、ひとたび大統領が変われば、前政府のした契約は一向に判らないという有様だ。だから確実な事業を行うことは真に困難な国なのだよ」

私は大いにその忠言に感謝した。それ以来パナマで別れるまで、彼は私のためにとても親切に尽力してくれた。パナマで船の乗換切符を求める際には、大いに割引の交渉などもしてくれた。一切を自分のことのように誠を尽くしてくれ、「また帰路に見舞うよ」とも言った。サンフランシスコの大きな工場などへ一つ一つ添書もしてくれた。別れを惜しみ、再会の縁を期して別れたのである。

同三十日、メキシコのアカプルコ湾に入る。暑苦しさは口にするのができないほどである。直ぐに上陸して日本及びペルーに電報し、台場を一覧して去る。台場も軍兵も特に見るべきものはない。

#### 白雪のふる郷いでて春がすみ たなびき初めしメキシコの山

十二月三十一日は即ち、我が国の一月一日である。

明治二十三年（一八九〇）元旦、メキシコ海岸を過ぎる。この日は晴天で微風あり。午前六時、一同は正装で甲板に上がり、六時十四分、太陽の昇るのを待ち、日本の方位に向いて新年の祝意を表す。私の部屋の入口には国旗を交叉して掲揚する。あらかじめ用意しておいた葡萄酒、麦酒などを開け、缶詰の肉、りんごなどを出し、みなで祝杯をあげる。それぞれ詩歌や俳句などを詠ずる。

一月十三日、中央アメリカのパナマに到着。一同を船に残し、私は小池と先に上陸し、宿を定めるより前にすぐペルーへ電報を出そうと電信局へ向かって電線を辿り歩いていった。すると、後ろからついてくる色黒の青年がある。彼はしきりに私に何かを周旋しようとするのか、ついに電信局までついてきた。私が道を変えてしかるべき宿をたずねようとすると、彼はまたついてくる。そして遂に私にこう聞いてきた。

「今夜はこのシアターで興業をするのか？」

私が驚いてその意味を聞くと、彼は私をかゝるわざし軽業師の親方と思ったのだという。私は大笑いして言った。（注・当時、日本の曲芸師の一座が海外各地で人気を博していた。）

「ところで、酒を売っている店へ案内してくれ」

「オーライト」と彼は言いながら、ある酒店に入ってしまった。その店で私は船中用の酒類を買い求め、その青年にチップをやって別れた。



私と小池はグラランド・ホテルに入り、翌日迎えに行った一同はイタリー・ホテルに宿をとり、便船を待つて数日滞在する。

白くろも同じ園生のバナマ路は わけや煩らふ人のくさぐさ

同十八日、インペリアル号でパナマを出帆。船長を始め、主な船員はみな英国人である。チーフメイトは私をととても手厚く遇してくれる。私はチーフエンジニア室に誘われ、ミルクシェーキにウイスキーを入れ、共に飲んだ。彼は、

「この船の水夫やボーイにはペルー敗戦後の浮浪人が多く、ことごとく盗みをするので十分に注意なさって下さい。もし部屋に忍び入る者があれば、遠慮なく打ち殺して差し支えありません。ピistolをお持ちでなければお貸しします」と言う。私はその乱暴なことに驚いて、

「親切はありがたいが、ピistolはいりません」と辞退した。もつとも手荷物はみな船倉に預けたので、一度も盗難には合わなかった。

この日、プノ号という船が私たちの船より数時間早く出発した。船長が言うには、

「どうぞご心配なく。明朝には私たちの船がプノ号を追い越しているでしょう。」

果たしてその言葉通りになり、私たちは思わず快哉を叫んだ。行くうちに南風は微涼を醸し、波はまた平らかになり、たいへん愉快であった。しかし下等船室は、牛豚と同居であるばかりでなく、そのすぐ脇で屠殺をする。また炎熱の気候は健康を害する恐れがあるという一同の願い出により、条件を設けて皆を上等室へ移す。

同二十日、赤道直下を過ぎる。

同二十二日、夜半にボーイがやってきて、

「日本人が一人、裸体で船中を乱暴しまわって困るのですぐに来て制してくれ」と言う。

驚いて行ってみると、坑夫の疋田が酔って暴れているではないか。一同に命じて彼を取り押さえ、部屋に入れて鍵をかけたが、なお室内で大騒ぎをやめない。番人を付け、一同は寝についた。彼は火酒を飲んでひどく酔った上に、ボイラーのすぐ側の部屋であったためその熱気が強く、頭に血が上って興奮した結果、このような狂態を現わしたと思われる。翌日より謹慎を申し付け、室外に出ることを禁ずる。

## ペルー到着

明治二十三年一月二十七日、ペルー国カイヤオ港に到着する。横浜を出帆してから正に五十六日目である。

社員数名が私たちを迎え、汽車でリマに入る。馬車数台でウエルタの本社に到着する。門には日秘の国旗が交差して掲げてある。ヘーレン氏と高橋氏をはじめ、一同が歓迎をしてくれる。宴を開き、愉快を尽くして散会したのは翌午前二時を過ぎていた。

雪をおかし暑さをしのぎ八潮ふり 今や涼しき白露の国

壮遊万里水雲兼 到处風情信意占

消費六句何取得 洪調言語寸余髻

(読み)万里に壮遊して水雲兼ぬ

(注)一句…十日間

到る処風情信意を占ねる

信意…人情

六句を消費して何を取得せし

洪調…なかなか進まない

洪調なる言語、寸余の髻

それから一週間ほどは道中の会計などの一切を処理し、また当地の事情を探索しつつ過ごした。

さて、間もなく登山となるので坑夫などに酒肴を与えようとしたところ、かの疋田がまた大酔の上に乱暴を始めた。役員がこれを制止しようとしたが皆々投げられ、田島技師は足に負傷した。最後に私がようやく彼を組み伏せ、酔いが醒めるまで縛っておくという騒動が起きた。田島はこの足の負傷のため床に就き、登山ができなくなってしまった。そうなると当分の間、山で一同を統御する者を欠くことになり、私にその任に当たってくれないかと相談があった。私には別に異存もなし、その任に就くこととなった。

そして、高橋委員長より左記の達しを受ける。

・年棒二百ポンドを給与する。カラワクラ鉱山へ詰め、高橋とヘーレン兩人を代表し総轄となって諸事円滑に取り計らい申すべきこと。

二月八日、役名を「諸務課長」と達しがある。

## アンデス越え

二月十二日、高橋委員長、番頭ピエドラ、簿記バソンプリオ、山口諸務課長、小池技手、坑夫、大工、手伝人夫など総勢十四人、午前七時三十分発の汽車で山へ登り、午後三時十七分マツカナ(標高2390m)に着く。私たちはマツカナ・ホテルに、坑夫たちはホテル・シーコロロンに泊まる。

同十三日午前八時四十三分、サンボテヒソーに着く。このところ鉄橋が陥落したために、鉄線につるした板の釣台または箱に三、四人ずつを乗せ、蒸気力で伝送することになる。眼下数十メートルに谷川が流れ、危険は言語に絶した。午前十時、無事サンマテオ（標高3216m）に着き、鉱坑などを見て一泊。

同十四日正午、サンマテオを出発し、午後一時チクラに宿をとる。ただし汽車はここまでで止まる。

同十五日、チクラ（標高3740m）に滞在。この地では四十日ぶりの好天気だという。この辺りは常に午前は晴れ、午後には必ず雨が降るといふ。同行者はいずれも高山病で多少の不調を感じているが、私一人が健康である。

同十六日午前十時十五分、一同いよいよ登山となる。私は「自分は徒歩で行く。従ってくる者は来い」と声をかけた。まず出発したのは、私と共に行くという血気盛んな勇の者たちである。彼らは急ぎ足で登ったが、私は亀の歩みにならつて徐々に登る。私を追い越して先に行つた者は、あちこち途中で倒れ、青くなっている。空気が薄いために皆こうなるのだ。私はかつて富士山に登つた際の工夫をして、口に手を当て自分の息を大切にしておきながら行く。遂に徒歩者の中では一番にカサパルカ（標高4150m）に到着した。もちろん、最初から馬で行つた者はずでに着いていたので、その馬を交互に下へやり、途中で倒れていた者たちを運び上げた。

主な役員たちは北米人ジョンソン氏の監督する製錬所に、その他はホテルに分宿させる。いずれも高山病など不調があり、苦情が多い。

同十七日、これよりアンデス越えにかかる。午前十時、一同騎馬にて出発。私は高橋君としんがりを務める。いよいよ険阻に至つたときには馬の腹帯をしつかりと確かめた。

高橋君と共に鉱山視察で寄り道をした後、カーデナス氏がカラワクラより出迎えに来てくれ、先に登って行く。私が続く。高橋君が最後となつていくうちに、寒威凛烈、雪に霏が混じってくる。目の前が見えず、幅一メートルもない急坂な道がどこかわからなくなる。ほとんど絶頂に達しようという時、カーデナス氏がいきなり馬を止めて、下にいる私たちを振り返つた。やむを得ず、私が馬を止めたその一瞬に、鞍が三十センチほど滑り落ちた。確と両足で馬腹を締めて飛び降りようとしたが、急坂のために地上に達するには数メートルも下に落ちねばならず、進退窮まった。間違えば、馬と共に深谷に転び落ちるだけである。いつそのこと両腹を蹴り込んで一目散に山頂に飛び上がろうとしたが、鞍がすっぽり抜け、私は数メートル下の岩石の上に仰向けに投げられました。同時に、馬は鞍と腹帯に後ろ足をくぐられ、駆け上がるかと焦るが叶わない。バタバタと後ずさりして、遂に私の胸の上に大きな尻をドシンと落とし、それから左に転倒して、高橋君を馬もろともに追い倒し、また左に転んで、たちまち千尋の谷に墜落していったのである。

その時私は後頭部を石に打ちつけ、肋骨は砕けたかと思うほどの痛みで、気もほとんど失つた有様だった。が、馬の最後を見届けたく這い出して深谷に臨んで見ると、馬は七転八倒して岩石の上を転び落ち、遂に大岩の間に首をつつこんで倒れ、後ろ足を振り回して苦しんでいる。そのさまは、実に哀れ、憫然の極みであった。

諸共に転びし駒の谷底に いなくな声ぞ哀れなりける

一方の高橋君は、馬と共に駆け回り、外套がいとうと合羽かっぱにぐるぐる巻かれていた。やつとのものでその大きな体を跳ねこし、私に向かつて、

「どうだ山口、死んだか！」と叫んだ。

その声に応じて、

「否、死にはせぬ」と、私はようやく答えた。

実際のところ、私の乗っていた馬はアラビア種で下腹が極めて細いため、かの急坂を上るには胸繫むながいなしでは無理であったと思う。また、鞍が抜けたときに横隔膜のあたりを蹴り込むのは、かつて聞いていた故智にならったものだ。昔、ある馬術師が吉原の鉄漿溝てつじょうのぼを馬で飛び越えようとしたら、両方の後足が溝の中に落ち込んで進退窮まったとき、その人の頓智とんちで両腹を強く蹴ったところ、馬は一目散に飛び上がったというのである。

さて私は、命に別状はなく身体の甚だしい苦痛は去ったとはいえ、二万尺注・六千メートル。実際はそこまではなかったの絶頂における風雪の中ではどうしようもなく、ひたすら高橋君の保護を受けていた。私たちの災禍を知らずに一鞭むちを当て飛び去ったカーデナス氏は、我らが後から続いて来ないことを怪しんで馬を引き返してきたが、英語を解さない彼はひたすら心配するばかりだった。私の馬を引き上げるには相当に迂回せねばならず、とても連れて来ることはできないと思っていた。だが、彼はその峻坂をものともせず、驚くことに直ぐに長鞭をふるって、血だらけの馬を追い上げてきたのである。これには実に感嘆した。そして、彼は私に再びその馬に乗れと勧めてきたが、これは辞退して、その馬をカーデナス氏に譲り、山坂に適した高橋君のラバを借り、高橋君はカーデナス氏の馬に乗って出発したのだった。

カーデナス氏は、ペルーの現大統領がチリ軍を追い払って、リマを回復したときの伝令使を勤めたほどの人である。比類ない馬術の名人で、いかなる険山も平地を行くがごとく疾駆しゆくと去ってその影はすぐに見えなくなる。

その後、高橋君の後をついて辿るうちに、数百メートルほどの急坂を横切って行かねばならなくなった。だが、雪が凍った急路では必ずや滑り落ちるに違いない。命あつてのことだから、この危険は侵すべからずと考え、私は一策を立てた。まず先に馬を放し渡らせ、我らはこれに続こうと。高橋君も同意し、ようやく無事に渡ることができた。しかし、目指すヤウリ村標高4192mまではここからまだ約三十キロあるという。カーデナス氏は見えず、高橋君も大分遠くに駆け去っている。私は心細くもあつたが、片手で痛む箇所を押さえ、片手で手綱を取って行く。道もなく家もない山中をポツポツ進み、晩景にようやくヤウリに入る。医師、社員などが途中まで出迎えてくれ、応急手当てを受けて床に就く。

## カラワクラ鉱山に着任

二月十九日、私と病気の坑夫二人はヤウリに残り、その他の者は順次カラワクラ鉱山へ行く。

同二十一日、私は傷所を耐えて馬でカラワクラ（標高約4700m）に行き、床に伏す。

同二十四日、左記の達しを發する。

一、 明日二十五日当鉦山の開坑に着手するようにとリマの本社より達しがあり、この段を通知する。

明治二十三年二月二十四日

カラワクラ鉦山事務所

山口 慎

カーデナス

技師 田島晴雄殿

鉦山掛 小池政吉殿

就業時間についてはおよそ一週間内は適宜取り計らうこと。

追ってそれにつき通達が有るのでこのことを申し添えておく。

第一号告示

一、 酒類、砂糖、ろうそくは給与食料外にて全て自弁たるべき事。

右兩名、鉦夫等一同へ

同二十五日、開坑式を行う。サンフランシスコ坑口に日秘兩國の国旗を交叉し、その前の机に、おみやまのみみこじ大山祇命、正一位稻荷大明神、嘉良和久良山神を安置し、鉦夫等が試掘した鉦石および酒肴を供える。高橋委員長をはじめ、役員一同列席、兩國の鉦夫および雇人みな陪席する。まず神酒一杯を頂き、次に酒宴を始める。遂に歌舞に及んで一同解散。見物人たちが人垣をなしていた。

同二十六日、高橋君は北米人カイヤード、ピエドラ、バソンブリオ、小池等を率いてビクトリアの製鍊所の敷地の検分に赴く。小池一人が戻ったが、他は皆ヤウリへの帰途に就いた。田島技師に早々に登山するようにと申し送る。

同二十七日、バソンブリオ氏が帳簿などの件に付き、ヤウリから戻ってくる。高橋君からの来状によると、明日の汽車でリマへ行くという。また、ヘーレン氏と田島技師らと相談の上、製鍊所の場所について報知しなくてはいけないので、昨日検分した場所を至急測量してほしい。田島は早々に登山するよう取り計らうので、全て不都合がないよう注意してほしい、等々。小池技手は、坑夫六人とペルー一人を引き連れてビクトリアへ測量に行く。

同二十八日、バソンブリオが今朝リマへ帰り、およそ一カ月以内に帳簿を送るから、それまでは報告には及ばないという。小池、本日もビクトリアへ測量に行き終了した。

三月一日、書記アルベルト、歯痛のため欠勤。

同二日、通訳の尾須氏が、氣候に耐え難いという理由で辞任を申し出たことにつき、リマ本社へ通達する。

ちなみに記すが、私と屋須とは部屋が隣である。居所の構造は、加工されていない石を積み上げた壁に、その凹凸を覆うために寒冷紗をつり下げ、屋根は亜鉛の板のみで葺いてある。ここに寝台を置く。負傷がまだ全治せずには臥床していたある夜半過ぎ、人が来た。戸を開け静かに入ってきた者は、頭部を白布に包んでおり、まるで幽霊のようである。薄明かりに透かし見ると、屋須に相違ない。何事かと問うと、彼は震え声で、

「山口さん、私はとてもここには耐えきれません。雪が隙間から舞い込むので上へ布を吊って寝ましたが、やはり吹き込んで、これこの通り」と、両袖を見せて泣いている。

「今日もこの上の岩穴に行ってみましたが、戦争当時の髑髏どくろがまだあります。もし私がここで死んだら、やはり彼らのようになるのだと思うと、実に情けなくなりました。ついては、何卒お暇を願って帰りたく存じます」という。私はその未熟さ加減に驚き、このような人間はとて役に立たないものと諦めた。

わが庵は富士よりたかきカラワクラ 黄金白銀つきせぬの山

酔余歩月路三叉 喜見巖頭雪色加

誰識山家寒食裏 満庭一白尽瓊花

(読み) 酔余月路を歩めば三叉となる

注・巖頭：山頂

喜びて巖頭を見れば雪色加わる

寒食：火を使わない食事

誰か識る山家は寒食裏なるを

瓊花：玉のように美しい花

満庭一白 尽く瓊花

同三日、カーデナス氏、帰山する。

同四日、ペルー人四人を雇い入れる。

同五日、小池技手より第二号の願書を提出する。内容は、製錬所の新築地および用水路の測量が済んだので、すぐに坑夫の飯場ならびに事務所の敷地の測量に取りかかりたく、至急地所を示して下さい、等々。本日よりで青木惣助の小頭代理を解く。

同六日、カーデナス氏がリュウマチで難儀のため、寝台でヤウリへ送る。

同七日、小池、風邪で欠勤。同人から、坑夫部屋に左記の通りの張り出しをする旨、届け出る。

定

第一条 職工の就業時間を左記のように定める。

第一項 坑夫の就業時間は交代制にし、左の通り。

一番 午前八時より午後四時まで

二番 午後四時より同十二時まで

三番 午後十二時より翌午前八時まで

第二項 坑内雑夫の就業時間を午前八時より午後四時を一人とする。

第二条 坑外職工は午前七時より午後六時を一人とする。

但し、休憩時間は午前九時に二十五分、正午に三十分、午後三時に三十五分間。

### 第三条 禁示

諸職工は食事外に食堂でみだりに飲食することを禁ずる。

火薬その他、破裂質の物品を携帯し、食堂または鍛冶工場に入ることを禁ずる。但し、この規則に違反し破裂を起こし疾病を醸す者は公病に取扱わないものと心得ること。

右の通り通達する。

明治二十三年三月

秘露鉱山鉱業掛

小池政吉

同八日、小池、出勤する。

同九日、小池とアルベルト兩人でカーデナス氏をヤウリに見舞う。私はまだ全快しないので同行できず。

同十日、第三号状を高橋委員長に送り、カーデナスが病気で下山につき、田島の登山を促す。

同十一日、アルベルトがヤウリより経費を受け取ってきたので、諸支払いを済ます。私は治療のため、小池とヤウリ近くの田んぼにある温泉に行く。一人別れてヤウリへ行き、ゼーゴレニ・ホテルに宿し、ドクター・ワレニチーンと会談する。

同十二日、小頭の吉田が来てまた温泉に入り、帰山する。同日、高橋委員長へ第四号状を送り、田島の登山を促す。

同十三日、早起きすると温泉の効能か、はなはだ快癒を自覚する。青木惣助の病気のため、ヤウリへ馬で医師を迎えにやる。

同十四日、ドクター・ワレニチーンが来る。

同十五日、サンフランシスコ領事館員の早川と三宅の両氏へ宛て手紙を出す。

「このたび鉱夫百五十人を日本より呼び寄せるはずなので、貴地へ来る節には、リチャードソン氏に頼み、船賃の割引をお取り計らい頂きたい」等々。

同十六日、小池技手より「乙二号により坑夫の病気の分の食料を差し引く」などの申し出がある。

同十七日、本日より、坑夫一同は八時間労働の事と定める。

同十八日、高橋君より十四日付の用状を受け取る。「メンデサーブル氏が来た折には厚遇すること。田島、カーデナスも二週間も経てば全快するであろう。当方はとても宜しい状況になってきた」とのこと。

同日、高橋君へ返書。「小池の測量が出来上がり、坑内へ廻る坑夫は八時間交代で働く。坑内用の木材、長さ五メートル、直径六寸から八寸まで（18cm・24cm）を取合せ百本と、ロープ径八分（2.4cm）の品を三百尺（90m）注文する」別紙に「去就を共にするので、堅忍不拔、成功を願う」と申し送る。

ちなみに記すが、その後材木の見本が来て、五メートル材一本の代価が二十ソール（日本円で約二十円）の高価につき、到底使用の見込みはなくなる。

リマにいる久万氏に答えて

白銀の花さく時をまてしばし

独りは久万じことほぎの酒

同十九日、日本各所へ便りを出す。

同二十日、一週に一回リマへ鉄道が通ることになった。バスンブリオよりインボイスが来たので、チクラへ向けて物品の早達を促す。

## カラワクラ鉱山の生活状況

そもそもこの鉱坑は一万八千尺(5400m)。注・実際は4645mだったの高所にあり、言うまでもなく空気が薄く、不慣れな者は呼吸困難になる。山を下るには何ともないが、山へ上がるときには腹膜が鼓動して呼吸が容易でない。もつとも騎馬ならば、さほど苦しくない。ここに来てから、私のような健康体で血色のいい者でも、皮膚は泥色を呈し、血管沈着、つまり気血の循環が悪く、従って気力も消沈するのは自然の結果である。居室は前に述べたとおり、我室などはまだ上等の方だが、その他の室はわずかに風雨をしのぐばかりのものである。

飲食物は、全てリマより鉄道および馬の背などで運ばれてくる物に頼っており、油断すると絶食の難に陥る恐れがある。米はもともと粗悪で、肉・野菜は山の辛い塩で煮るために、実に不味い。水は深谷の細流から小さな桶でペルー人が終日、少しずつ担いで上るのである。

燃料は不毛の岩石山なので、その深谷に薄く生えている苔を土と共に取り、天日に乾かしておいて用いる。しかし空気が薄いため、何度もマッチで火を付けようとするがなかなか付かない。やむを得ず、石油を注いでようやく焚き、半熟のものを食べる。さてまた、その石油の高価なことに驚くが我慢するしかない。ある時は、一缶九ソール半でようやくヤウリより分けてもらったこともあった。

衣食住の困難なことはおよそこのような具合である。

## 事態急転

同二十一日、ルーカスを馬の交換のためオロヤへ行かせる。

小池の用水路の測量図ができあがる。また、坑内測量及び分析を急がせる。まず坑内を測量しようと、小池は午後からサンフランシスコ坑に入る。日暮れになっても帰って来ないので、坑夫に尋ねてくるようにと坑内へ入れたが、大きな水溜りなどがあり、どこへ行かれたのかわからないと、むなしく帰ってきた。私は非常に心配だったがいかんとも仕方なく、あれこれ評議を凝らしていると、ようやく夜十時頃に「ああ、腹が減った」と帰ってきた。

どうしたのかと問うと、小池は、

「この山には実に驚いた。坑内はまるでガランドウで竜頭リョウサ(注・カンテラを吊るすもの)があるのみだ。あちこちに水溜りがあり、縦横に巡回中、ついに道を失って出ることができなくなった。やつとのことで薄明るい坑口に



行き合ったので、まずよかったと出てみれば、あにはからんや、我らの山ではなく、隣山の坑口に出たのだ。まずは命拾いした」

と言うのである。とりあえず彼は食事を済ませて寝に就いた。

このような予想外の山では一刻も油断はならないと、翌日より急いで分析に掛かせた。この分析結果は全く思わしくなく、ここにますます疑念を起す。小池に、分析の間違いではないかと注意する。それゆえ各所から見本を取り、何度ということなく試験を繰り返した。三日間昼夜兼行で十分な試験をした結果は、1000分の1.5から2であり、最初に日本で分析した100分の27から28に比べれば雲泥の差であることを発見した。

非常に驚き、かつ悲しむ。このような少量の銀分は、数百年来掘り出した後のもので、坑外に山のように遺棄されたものと同じなのだ。この鉱山は、決して利益をみることでできない老衰坑でしかないのだと、小池と相対して長い間嘆息するばかりであった。この実験結果によれば、もはや寸時も黙過するべきではない。充分に意見を述べて、高橋委員長長の判断を求めざるを得ない。分析の事実による意見書を作り、見本一切を添えて、小池技手の病気下山を口実の機会として高橋委員長に提出させた。

ここにおいて私は、この事業の見込みなきを悟り、独り心に決する処があつた。自ら警戒してすべての記帳を廃し、ただ記憶に留めることとした。そして、この鉱山にこのような相違があるということは、必ず何か曲事があるはずだと、その真相を探知すべく大いに努めることにする。

その小池の下山と行き違いに来た高橋君からの手紙の末に、

アンデスの山の白雪ふみわけて (後をつけよとあるので)

まろび甲斐あるいさほしもかな (とつけて返す)

注・いさほ：勲功

東京の母上からは、新聞と水天宮の神符を送りよこしてくれたので、ただちに返歌する。

たらちねの親の恵みのふかき海 高き山にもかなふ肌守

また左の二首をも添えて送る。

朝あられ昼はあわ雪夕は雨 秋は岩屋を照す月影

信濃なる雪ふる里の心地して昔をしのぶカラワクラ山

同二十六日、ペルー人の坑夫頭カマチョウが、日本人坑夫等がみだりに家材や坑内用の材木を使用しているという旨を訴え出る。小池へ出便。「手抜きはないか。順序を追って高橋委員長へ陳述するように。万一、同氏が日本へ出発後ならば、持参した書類をすべて焼き捨てよ」と申し送る。同時に高橋君へも出便し、私に代わって小池を下山させた理由を知らせる。

同二十八日、ヤウリ鉱山局より局長のブラボーと他一名、ならびに鑑定人ピロットと隣坑の代理人らが来る。

当方にはメンセサーブル氏が来訪、鉱山内外を検分する。その隣坑の代理人が、当鉱山から彼らの隣地へ水を流

していることにつき大変苦情を述べ立てるので、私とメンセサーブルも弁解する。以上が終わって一行に饗応しようとしたが、彼らは先約があるといい、皆ヤウリへ引き上げた。

同二十九日、メンセサーブルおよび屋須と近隣の鉾山を巡覧する。本日、材木と空気ポンプがリマより着荷する。

同三十日、社員の前田正名氏まさなへ、農商務次官に栄転の祝い状を出し、いずれこちらより好結果の吉報を送りたい旨を申し送る。

同三十一日、田島技師を迎えがてら、吉田と馬場をヤウリへ経費を取りに行かせる。高橋君より来状、「田島と小池の登山を見合わせる。これからは社員を下山させるときは、必ず本社の許可を得て取り計らうこと。これは、小池を許可なく下山させただけでなく、今回の凶報を持たせたことをヘーレン氏が怒っているためだ」という。ヘーレンおよびバソンブリオより会計の件、申し来る。

カラワクラ さかきによめば くらはから

## 坑夫とペルー人との喧嘩

四月一日、同二日、高橋君へ出便。「水道検査の件につき、メンセサーブル氏の先方への答弁は鉾山局よりヘーレン氏へ申し送った。小池は着後、電報をよこさず、万事が暗黒の内にあつて心配は一方ならない。これからは迅速に動くようにと注意を頼む」

同三日、出便の日。今朝、坑夫の田口が、本社雇いのアイルランド人鍛冶職かじローカと喧嘩になった。発端はローカが小屋の前を通りかかった時、田口が退屈凌ぎに牛の骨を投げて「これを食え」と言った。ローカが何かをブロークンな英語で言い返したのを、田口は、「お前は言葉を分かりもしないのに生意気だ。多勢をいいことに威張り上がっている」と言われたと曲解したようだ。それで飛び出して彼を投げ倒し、逃げるのを追って彼室に押しこみ、小刀でその脇腹を刺し、なお手を返して頭を衝いたが、保安帽をかぶっていたため刃が折れ、辛うじてローカは負傷を免れた。しかし、日本人坑夫らが加勢に行き、一人のローカに殴り掛かった。彼は九死に一生を得て山を逃げ下り、ペルー側の坑夫頭カマチョウに訴えた。ペルー人坑夫側は激昂し、ヤウリ鉾山局へ訴え、損害の弁償を要求すべきということになった。

その頃、山ではわが坑夫等は、ペルー人たちが大挙して報復に来ると考え、宿舎前面に岩石を積み上げ、もし攻め上ってきたら打ち砕こうと備える。山上と山下に二、三百メートルを隔てて対峙し、龍虎相撃の凄まじいこととなった。この時カーデナスと小池は不在のため、その裁定はもっぱら私の責任に帰する。私は、各役員の前へローカを呼び出し、

「いかなる間違いでこのようなことが起きたのかを公平に裁定するから、決して騒ぎを起こすことのないように」と言い渡し、まずは応急手当てをして医師をヤウリから呼び寄せ治療させた。

一方、山へ登り、我が坑夫たちを取り鎮めようと宿舎の小屋に行くと、当事者の田口は足を鉄砲で打たれたと訴える。見ればピストルで脛すねを打ち抜かれている。これまた医師の手当てを頼んで、嚴重にその負傷の事情を質問すると、何を考えているのか、かねてから禁じておいたにも拘らず、彼はいつのまにか自らピストルを買っており、そのピストルで更にローカを打とうと、弾薬を込めて試しているときに暴発して自分の足を打ち抜いたことが判明した。当時の医師はこう鑑定した。

「これは他から来た玉ではない。なぜなら田口のズボンを点検し焦げた箇所を見たところ、遠くから来たものでないとわかった」

これについては、その医師の兄弟が少年のとき人を傷つけてしまった折、彼が先に自分を傷つけたから自分も彼にやり返したのだ、と言い訳するために自分自身を小刀で傷つけたことがあったという。そのために今回の偽りが露見したと一笑に付した。しかしローカは夕刻になって、治療と鉱山局に訴えるためにヤウリへ去るといので、私は金を渡し、遺憾の意を述べて送り出した。

同夜、高橋委員長から、「相談の件があるので至急下山せよ」と言ってきたので、三月末までの経理を屋須に、その他の諸務をアルベルトに託す。

### 高橋是清委員長の帰国

四月四日、私がまさに下山しようとする、誰もが本社の命令に応じての下山とは信じない。昨日の出来事について恐れて逃げるのか、あるいは、どんな処置を行うつもりか、などと疑義百端の模様である。私は既に馬に乗っていたが、一同に向かつて声明した。

「私は皆が心配するようなことで下山するものではない。また皆を捨てて去るわけでもない。実は昨日本社からの命令で、至急下山せよと言ってきた矢先に、昨日の事件が起こったのだ。皆があれこれ疑うのも無理ないことだが、命令によって下山することになった次第だ。もともと、今回の争闘の件は本社へ届け出て、公平の処置をとるから、一同安心して業務に従事してほしい」

そう言つて馬に鞭打ち、カラワクラ鉱山を出発した。時は午前八時であった。同行は本社の小使ルーカス（元陸軍中尉）で、馬一頭を曳かせていく。これはチクラに留まっている田島の登山用である。カサパルカで昼食、午後四時にチクラに着き、例のホテルに宿す。そのホテルの亭主が、私に密かにこんなことを言った。

「先般、貴下の一行が登山の時にご覧になったサンマテオの鉱山を、ピエドラ氏が全部で二千五百ソールで約束したのに、出したのは一千ソールだけである。ピエドラは、その残金を自分が預かっているのは、まさしく他日の用意のためであるというが…」と彼は、この取り計らいはピエドラが自分の利を計る奸策なのではないかと、思っているようであった。私はその真偽を知らないの、ただ聞き置いた。

同ホテルで、右の鉱山主のモンテス氏にも会談する。

本日、途中で田島が登山するのに出会い、委細に善後策を託す。

同五日土曜日、午前七時チクラを発し、午後五時リマに到着。ヘーレン氏の名代ピエドラ他、カーデナス、小池ら皆で私を停車場に迎えてくれる。

同六日、高橋委員長に、先日私の独断で小池に書面を託して下山させたことについて再度説明し、これに対してヘーレン氏が立腹した事を聞く。委員長がこれより、表面上は善後策を取り、内実は事業を放棄することに決した事などの詳細を聞いて、将来の手続きなどにつき、秘密の約束をする。

同八日、田島へ「高橋君は十日に出立し、二十日バナマ発」と連絡状を出す。また屋須へも念入りに書き送り、とにかく私が山へ戻るまでは下山せずに待つようにと頼む。これは、田島は自己の勝手ばかりをしており、また配下の者たちは始終騒動を起こすため屋須が堪えかねているので、その足止めを頼んでのことである。

同九日、ヘーレン氏から、高橋君と共に来訪してほしいと電話が来たので、我ら二人と伴氏を連れて行く。ヘーレン氏から「高橋君の帰国中は山口君を代理としてほしい」と提言があったが、高橋君は「そのような権限は与えがたい」と言う。私も、仮に命令されても応じられないとの決心だったので、この件は遂に止んだ。

高橋君とロンドン銀行に行き、頭取ウェールズ氏に面会して金銭のことを相談する。同日カーデナスが帰山するのを停車場で見送る。

同十日、高橋委員長が日本へ帰国の途に就く。カイヤオ港までヘーレン氏をはじめ、社員一同で見送る。サンタローサ号で出帆する。風来のボーイである紀州人の岡山という者が従っていく。ただしバナマから帰ってくる約束である。なぜか、この者の意中には不快なものがあるように外から推察された。

#### 加比亜遠港別高橋君

(読み・カイヤオ港にて高橋君と別れる 注・慎はこの漢詩を大きな掛軸にして残した)

#### 海門分手暗銷魂

心事自今誰与論

#### 帰去来兮安嶺窟

艱難玉汝亦天恩

(読み)

海門手を分ち暗に銷魂たり

心事今より誰と与に論ぜん

帰りなんいざ 安嶺の窟に

艱難汝を玉にするも亦天恩なるか

(意訳)

海峡は二人を分けて人知れず魂が抜けたようだ

心に思うことを今からは誰と共に論じたらいいのか

さあ帰ろう、アンデスの鉄窟に

艱難が我を磨いて玉にするのもまた天の恵みであろう

同十一日、ヘーレン氏から来訪せよとのことで、伴と共に行く。

「昨日、高橋さんの出帆の際の様子には、実に不可解な所があった。何か腹に思うことがあったのではないか。あなたはどうか感じたか？」と、ヘーレン氏は不快の内に怒気を含んで質問してきた。私はもちろん、そうであることを知りながら淡然として答えた。

「ななに、そのようなことはないでしょう。私は彼と長くつきあっていますが、彼はああいう風な人ですよ。何もお気に留められることはございませんよ」と微笑したところ、

「そうでしょうか。そうならば良いのだが、なんだか何を言っても一向に打ち解けず、ろくに返事もせずに発つてしまったから、私は非常に面白くなかった。あなたがそのようにお考えならば、私も安心しました」と、ヘーレン氏はほっとした様子であった。昨日の伴の話では、ヘーレン氏に高橋氏が発発するという電報を出してくれるように頼んだところ、彼は、

「山口さんは金があるでしょうから、お出しになったら宜しいのでは？」と不機嫌だったという。しかし今朝、ヘーレン氏と前件の問答の結果、彼の疑念は消えたらしく、彼が右の電報料を出すと言ってきた。

同十二日、十三日、十四日、リマに滞在。

## ヤウリ騒動

四月十五日(日曜)、ヘーレン氏より受け取るべき金七百五十ドルのうち百ドルを受け取る。ペルーの金額では六百九十ソール五十五セントポである。

同日、カラワクラ鉱山より飛報があり、わが坑夫一同がヤウリの鉱山局へ押しかけ大騒動を起こしたので、私に「大至急登山せよ」と言ってくる。

同十六日、私は小池技手と通訳の大関正之助を連れて、午前七時半の汽車で登る。午後七時チクラに着き、ホテル・トラサンジーに泊る。この時ヘーレン氏から田島とカーデナス両氏宛の書状を預かる。

ちなみに記すが、通訳の大関は、元来ヘーレン氏方に雇われているのだが、伴などのように秘密に預かったのではない。このヤウリ騒動には是非ともスペイン語を円滑に話せる者がいなければ、正理であっても非理に陥いる恐れがある。なにより、私はこの鉱山が偽物であった原因を究明しようと苦心するものの、言葉の壁があり大変困っていた。そこでこの機会を幸いと、あえてヘーレン氏に頼んで大関を同伴した次第である。そしてこの大関は、私に全ての事情を話してくれ、ヘーレン氏から受け取るべき金銭の請求の件についても便宜を計ってくれるなど唯一の親友となった。

同十七日、乗る馬が迎えに来ないため、やむをえずチクラに滞在。

同十八日、別の馬を雇って午前八時チクラを出発。小池は直にカラワクラ鉱山へ行き、私は大関を従えてヤウリに行き、すぐに鉱山局長ブラボー氏に面会した。彼によると、

「この事件は言語不通の誤解によって起きたことだ。双方が了解したので、一同はすでに帰山させた」という。私はその好意に感謝して別れた。そもそもこの騒動は、何も根も葉もないことだったので、屋須が間違った通訳をしたために起きたのだった。一同は、鉱山局長が彼らを欺いたといつて大いに憤慨し、各々が石を投げて鉱山局に手向かったため、局長はじめ局員はやむをえず、応急防衛として小銃を向け、村中に半鐘を乱打して知らせたので、村民総出となって日本人を全員捕縛し入牢させた、という珍事であった。

同十九日、カラワクラにいる田島から、ここヤウリから馬を廻すよりも一度カラワクラに帰山してからチクラへ行く方が順道だと言ってきたので、大関と午後四時に帰山し、翌日の午前三時まで、諸会計の整理をした。

柴根しずなく賤しずが岩屋の夕煙　ながくも旅のあわれおそひく

同二十日、小池技手が、田島技師との折り合いが大変悪いときりに苦にすることで、「いまは会社のためを思い、自分の間は充分忍耐を勉強せよ」と説諭する。

同二十一日日曜、小池とピストルで負傷した坑夫の田口をリマへ下山させる。この時本社へ、小池には既に当座の金を渡してあるので、今後指示するまでは決して金銭を渡してはならないとの注意を伝える。

同二十二日

漂泊天涯似断蓬　自知性癖困斯躬

可憐安鉄山頭夢　多在寒涛苦雪中

世塵寧足汚丹心　侠骨猶任霜雪侵

只有家郷老親在　春風四月淚霑襟

(読み) 天涯に漂泊するは断蓬に似たり

自ら知る性癖、斯躬このみを困あやうくする

憐れむ可し安鉄山頭の夢

注・断蓬：根を断たれた蓬

多く寒涛むしに在り雪中に苦しむ

世塵むじ寧なほる丹心を汚すに足る

侠骨なほ猶霜雪侵すに任す

侠骨：男気

只家郷に老親在る有り

丹心：真心

春風四月襟なほを霑うるおす

同二十三日、日本の高橋委員長へ、今日までの事の一切を書き送る。自宅へも、ことによると帰国するかもしれないが見通し難いので、自分宛てに出便はしないようにと書く。

また本社へ以下を申し送る。「ヤウリ騒動を起こした坑夫に対する罰金は無論彼らに課すつもりだが、他の六十ソーレスはヘーレン氏の雇人であるから、雑費から支払うのが適切と思う。大関は用が済み次第、帰すべきであ

る。小池の一身はヘーレン氏の指揮に任せざるべきだが、小池が自分で借りた宿代は出しかねるので、その旨を関係者に伝えてほしい」

同二十五日、小池へ出便。「金銭を坑夫より借入したと聞いたが、この際使用を慎み、カイヤオなどへ出る保養などは無用である」と注意する。本日、ヤウリ騒動につき一切を取り調べる。

同二十六日、二十七日、鉱山局長ブラボー氏とサンタマリヤ氏が来る。昼食をふるまい、カーデナスが彼らをヤウリへ送る。

同二十八日、二十九日、三十日（日曜）、ヘーレン氏と伴氏へ出便。ヤウリ騒動についての書類を送り、「罰金三十ソールスは彼らより出させるが、その他は情状を酌量し、しかるべき指令を頼む」と申し送る。

#### 山居書感

今日帰りまた来る雁を待つ身こそ 一と日三とせの心地こそすれ

今日もまた あられふるなり故郷のわが友とちや集ひくむらむ

五月一日、四月末までの坑夫らの給料を計算し、カーデナスよりその金額を受領する。

同二日、カーデナス、カマチョウと共に炭山の検査に行く。坑夫等へ四月分の給料を支払う。

同三日、田島よりヘーレン氏の書状を示される。日本からの電信に、「株金募集は不可能、一同引き揚げよ」とあると。この電報は即ち、高橋君が出帆前に私と示し合わせ、この事業は断然放棄するが、表面は「カラワクラ銀山の鉱石が低品位であるため、大量採掘処理にしなければ採算が合わない。なお資本を増募して大規模にするために一時帰国する」としたためである。（注・高橋は出帆前に、「増資して新会社が設立できなければ、現在までの日本側出資と権益はすべて放棄する」という新たな契約をヘーレンと結んでいた。）

が、帰国早々に「出来ない」というのは好ましくないので、着後およそ一か月半を過ぎてから「不可能」と電報を発するとの約束していたのだった。高橋君が二か月近くに及ぶ長旅を経て帰国の上、更に一か月半を待たせられる現実である。実に長く感じるのみならず、その間、山上山下、田島技師をはじめ坑夫らに至るまで、代わる代わる喧嘩騒動をおこされ、私ただ一人でその後始末を行うのは言語道断と思える境遇であった。

#### 畢生志業百無功 安鉄山中恨不窮

#### 驚破寒灯々下夢 一声帰雁月朦朧

（読み） 畢生業を志すこと百なるも功無し

安鉄山中恨み窮まらず

寒灯灯下の夢を驚破す

一声の帰雁月朦朧

注・畢生…一生涯

不窮…尽き果てることがない

白銀の花さく時を待ちわびつ　うきに堪へしも昔なりけり

本日、ヘーレン氏より高橋氏との契約の書面を送ると言ってくる。

五月四日、小池への返事に「金銭云々のことは了解した。当座君に預けた金のことは伴へも申し送ってあるので十分に心せよ」と注意をし、左の歌を贈る。

忍ばずの池のかもめの浮かぶせは　忍が岡にすみてこそしれ

本日、高橋君がパナマを出帆との連絡が来る。

## 病臥する

五月五日、伴へ出便。「小池のことはよろしく頼む。彼と田島との金銭のことも当分、貴説の通りに頼む。ヤウリ騒動の件は、郵便が行き違ったので、なおご一覧の上御指示を願う。鉱夫の食料については、これまでも心配してきたが手だてなく、なお考えておく」

同六日、高橋君へ昨日までのこと一切を書き送る。故郷の友達等へ詩歌数首を送る。本日はカーデナス氏の誕生日で、田島、大関とヤウリへ招かれ大御馳走になり、夕刻イグレシア氏も共に帰山する。

同七日、八日、ヘーレン氏より田島へ宛て、日本からの電信を全部見た上で種々の問い合わせをしてくるが、返事の仕様もないので日本へ向け左の電報を出してほしいとヘーレン氏へ伝える。

「高橋の帰朝まで、中止を結約した。山よりの手紙は直に着く。返事無用」  
サンフランシスコの川口源次郎氏に前もって頼んでいた小使二人の件について返書が来る。しかしこれは、こちらからの断り状と行き違いに来たものだ。

同九日、十日、エグレシヤ氏がヤウリへ行く。私は病臥する。

同十一日、リマより、青木惣助が大怪我をしたと知らせがあり、至急私の下山を促してくる。

同十二日、病臥。

同十三日、病気はまだ全快しないが、青木の件が心配でやむを得ず、大関を従えて午前八時にカラワクラを出立、午後五時チクラに宿をとる。

同十四日、午前七時チクラを出発、午後五時にリマ着。青木惣助の始末を聞くと以下の通り。

去る五月七日、青木は病気がだいぶ快方に向かった頃、ヘーレンの小使ペードロ・サバラという者の周旋で密かに酒を買い、婦人を社室に引き入れ大酔いのうえ、ペードロと喧嘩になった。遂に彼を室外に追い出したとこ



ろ、ペードロが外から戸を締め、青木は彼を追うことが出来なくなつたのを怒つてガラス戸を破り、そこから短刀を突き出し振り回したため、腕はガラスで切れ、血だらけとなつた。そのまま寢床に戻り酔眠していると、夜半になつてペードロに呼ばれて庭園に走り出たところ、物陰で待ち構えていたペードロが小銃で二発を撃つて逃げ去つたのであつた。青木は両腕と肋骨三本を撃ち貫かれ、驚いて自室に逃げ込もうとしたが、自室の前を歩き過ぎて表門の戸に突き当たつて仰向けに倒れ、ほとんど人事不省となつた。このとき社室に居合わせたのは、スペイン語の分からない小池技手、久万ら三人の日本人のみで、伴は自宅に帰つていた。この騒ぎを彼に知らせず、処置をしなくてはと焦つたが、表門の鍵はもともとペードロの管理なので手に入れることはできない。困つた末、小池と庭師の松本辰五郎とが塀を越えて伴の家を探したが、言葉が通じないため人に聞くこともできない。ようやく松本の手伝い人のチャンチャボの家を尋ね、彼に頼んで伴の家へ行き、夜明けに右四人は社へ戻つた。無理に錠をこじあけ内に入った時には、すでに事件から数時間が経つていた。

青木を看護する者はピストルで負傷していた田口、病中の久万、大工の北川のみで非常に困つていたところへ右四人が来たので、みなで寝台に負傷者を乗せ室内に運び込んだ。一方で医師を頼んだが容易には来てくれず、ようやく翌八日午前八時頃に来た。応急手当を施して、午後四時三十分頃、やっと青木を慈恵病院へ送り込むことができたという。

しかし、右の加害者ペードロ・サバラはどこかへ身を隠しており、私はあちこちへ連絡し、やつとのことで彼を取り押さえた。だが狡猾な彼は、たちまち巡査に金を掴ませて途中から脱走した。このようなことを二回もくり返し、遂に彼を罰することができなかったのは実に遺憾である。同時に、この国の巡査は二、三円の金に満足し、自分の職責を全うすることができないということは、誠に憐れむべき墮落者と言わざるを得ない。

同十五日、私は日本からの内報を早く得たく、幸い病氣のためにリマに滞在していたのだが、ヘーレン氏は山にいる坑夫等のことを懸念し、急に私に登山を要請してきた。私は病氣につき猶予を頼んだが、疑つたヘーレン氏は一緒に馬車に乗り、私のある医師に診察させた。医師は私の身体を念入りに見て、「八十九日間は当所で治療し、しかるのちに登山するように。またあまり運動はしないように」と非常に心配し、水菓と発泡菓をくれた。

同十六日、鉱山にいる屋須へ青木の件を知らせ、また坑夫頭に加藤と馬場へも、青木は生命の心配はないと申し送る。

同十七日、青木を病院に見舞う。

同十八日、越前人の勝村氏とチョリヤス海水浴場を一覧する。

同十九日、青木を見舞う。夜、伴の家を招かれる。

同二十一日、二十二日、二十三日、屋須へ、カーデナスから一千ソールをまだ受け取っていないならば、早々に請求せよと申し送る。

ヘーレン氏から「山田技師が日本を出帆した。ついでには貴殿から田島宛てに、下山は山田技師が来るまで見合わすようにと、書状を出してもらいたい。日本に宛てても同様に出してほしい」と依頼される。

同二十四日、日本へ出便。「ヘーレン氏は山田技師が出帆した報せを受けて満足している。私はこのところ寒気のせいか非常に具合が悪く、また少々頭痛もあるため仕方なくリマへ下って治療中である。坑夫等はだんだん快方に向かっているので安心していただきたい」

同二十七日、田島へ出便。「下山は私が帰山するまで見合わせて頂きたく、ヘーレン氏より堅く頼まれている。もしも強いて下山するならば、本社への立ち寄りには御免蒙りたいという勢いだから、当分はお留まり願いたい」  
同二十八日、旧上田藩主・松平忠礼公へ書状を差し上げ、旧藩人の共有金を実業に使用するか、または他の利益増殖法に改めるかして、現在困窮している者をご救助頂きたい旨の意見を陳述する。

同二十九日、鉱山の屋須からの報告に、また鉱山で坑夫の伊藤と荻谷とが喧嘩し、荻谷が負傷したとある。

#### 木も生へず鳥も飛ばねどよしあしの言の葉しげき からわくら山

同夜、高橋君をパナマまで送った岡山が戻って来て、金銭も衣類もことごとく全部盗難にあったので、赤面ながら一言申し上げておくと言う。私はこれを信ずることができない。

同三十日、ヘーレン氏が「田島が手紙をよこし、彼はペルーを去ると言ってきたのだ。貴下からその理由を質して、きちんと私に説明に来るように話を通してくれ」と言う。

小池の依頼で、日本本社にいる技師の河野鯨雄へ出便する。「当地は、災害が続いて困却の次第である。もつとも高橋君から委細はお聞きのことと思う。小池氏も儉約している」等々。

同三十一日、ヘーレン氏から連絡があり、田島とカーデナス両氏からの電信で、「今日午後三時、坑夫頭の加藤要助が田島技師を害するということで、加藤をヤウリの牢舎に入れた。来る水曜日に田島と坑夫一同は御指図を待つて下山する」と言ってきたという。それにつきヘーレン氏が明日、私を訪問する予定とのこと。

#### 帰るさにあはれヤウリの山おろし はげしかれとは祈らざりしを

六月一日、ヘーレン氏から、田島と加藤への処分は穏便に計らってくれと依頼が来る。また私には水曜日に登山して全ての始末をつけてほしいと言うので、その旨を電信で田島へ通達する。

同二日、三日、ヘーレン氏から「登山を見合わせてくれ」と言ってくる。

同四日、午前七時、臨時雇いのバインと大関が登山する。

同五日、六日、高橋君へ出便。六月十一日までに受け取るべき金銭はすべて受領済みである事、またヘーレン氏から依頼の田島の件も申し送る。

同八日、日本から六月六日に出した電報で「昨五日高橋帰朝シタ」と言ってくる。

同九日、ヘーレン氏が来て、「カラワクラにいるバイン氏からの書状によれば、田島は下山を企望の様子であり、加藤に登山を許すなら自分は是非とも下山すると言い張っている」という。もし田島が下山すれば、私は病気にもかわらず差し当たって登山せざるを得ない状況となる。またヘーレン氏は、山で坑夫等が度々騒動を起こすのは外聞も悪いので、私に坑夫等をチャンチャマヨの農場に当分の間連れて行ってほしいと言う。私は、自分がきちんと統率するので敢えて場所を変える必要は認めないと答える。

同十二日、ヘーレン氏とピエドラが来る。鉱山の始末について相談し、一旦は、坑夫一同をリマへ引き取ることに決めたものの一変して、是非とも私に登山して監督を頼みたいという。田島は随意に任せるが、坑夫等については、日本から山田技師が来るまで、なるべく留め置いてほしいと言う。私もこれに同意し、いよいよ明後日十四日に登山すると決める。

同十三日、ヘーレン氏から受け取るはずの七百五十ドルのうち、百ドルを受領、支払いを済ませ、高橋君へ今日までの事情をすべて申し送る。

同十四日、午前六時、登山しようとする日本人一同が私を停車場に送ってくれる。しかし便所に行っている間に、うっかり汽車に乗り遅れてしまい、やむを得ずむなしく帰社し、来る水曜日を待つことになってしまった。わが遅鈍なることを嘆息したが、配下の者は、私が日本からの報せを当地で待ち受ける必要があると口々に言うて慰めてくれた。

同十八日、午前八時、一人で登山する。配下の皆が停車場まで送ってくれる。バソンプリオは要書を持ってくる。午後七時チクラ着。ルーカスが馬を連れて待っていた。

同十九日、午前七時半、チクラを馬で出発、午後三時半カラワクラ着。このとき私の身体はまだ完全に回復しておらず、アンデスの山を何十キロも疾駆したために鼻血が甚だしく出た。途中で馬に水を飲ませる時、谷川のほとりで何度も頭部を冷やしてようやく止めることができた。ああ、もし自分がここで倒れたとしても、誰か私の骨を埋めてくれる人があるだろうか。しかし、これもまた青山なるかな。

同二十日、田島、バイエン（ヘーレンの代理人）、カーデナスならびに坑夫等より個別に事情を聴き取る。これからは私が坑夫等を監督することに決め、ヘーレン氏へすぐ手紙で「坑夫等のことは問題を起こさぬよう穏便にやるのでご安心を」と申し送る。

同二十一日、バイエンから百四十四ソールズ十二セントアポを受領、坑夫等へ六月末までの差引勘定をして給料を渡す。

同二十二日、伴より来状、「田島氏とはわが社創業以来という関係もあるので、なるべく寛大な説諭を頼む」と言ってくる。また、「ヘーレン氏の代理人であるバイエン氏に対し、坑夫等が敬意と礼を欠くのは、間接的にヘーレン氏を侮辱することになるから諸事に「ご注意を頼む」という。

高橋君へ出便し、「もし本社が優柔不断で万事果敢に対処しないなら、私の銀座の店の都合を口実にして私を日本へ呼び戻して下さい」と頼む。

同二十四日、田島が賄い担当の小林を連れて下山すると言うので、ヘーレン氏へ左の書面を送った。

「先に加藤の件につき、登山後に私が詳細を取り調べたところ、坑夫らが役員側の取り扱い方を粗暴であるように感じたために生じたことと思われます。加藤を許し、その上でわが坑夫等の今後の規則を共に作りました。いまは皆満足し従業しております。また坑夫等が役員に対し無礼であるようなお申し越しがあつたけれども、彼等は決して故意にそのような振る舞いをしたわけではないのです。もともと、以後充分注意するようにと厳重に申し付けましたのでご了解頂ければと思います。

田島へは、会社創立の重大なこの時期、百事大切の場合なのだから、一身上の事に至るまで、注意に注意を覚えてほしいと利害を述べて説諭致しました。一人別れて当国を離れるなどという事は、全くもつてのほかの心得違いゆえ、そのような考えはきつと改めるべきことと申し聞かせました。

もつとも、ご依頼の件のうち、当国を離れない等々の約束書きは、自分は罪人でもないのだから認め兼ねると申すので、よくよく口頭で誓いを述べさせました。田島がそちらリマに滞在する以上は当方にて監督するわけにもいかず、貴君においてよろしくお取扱い下さいますよう、この段あらかじめお断り申し上げておきます。但し、当人の用向きは貴君にはご承知の事であろうと思いますが、私には全く分かりかねます。

また、賄い担当の小林という者は元来柔弱で気候に堪えがたく、やむを得ず下山を許しました。御地は暖かいのですぐに回復するでしょうから、植木屋の手伝いなどには至極適当な者かと思えます。 早々 頓首」

同二十五日、二十六日、屋須弘平が、養生のためにしばらくの間の下山治療を願ひ出てきたのでヘーレン氏の指揮に任せる旨をリマへ申し送る。午後十時より雪が降り始める。

同二十七日、終日雪が降る。但し当国は五月より冬期という。

同二十八日、終日雨と雪が混じり降る。カーデナスがヤウリに行く。屋須、吉田、佐々木等が病気のため、ヤウリから医者を招く。

同二十九日、三十日、伴へ出便。その略は左記の通り。

「日本本社と契約破綻の事は、速やかに私にお漏らし下さつても構わない。また一同下山とは、私に一同を引き連れて来るようにとの意味なのか。この度の事は契約の成否の点にあればさほど驚くこともないので、この上はお互いに名誉を守るのみ、いよいよ下山せよとの通知までは待つべきと思う。且つ貴殿のご意見の通り、下山の際には他に目立たぬよう三、四人ずつ、ぼつぼつ戻すことにする。その到着場所はカイヤオ港にすべきかと考えている。

その他、次の火曜日には屋須氏が病人三人ほど引き連れて下山する予定。田島は諸君の力では是非とも差し留めよ。後日の責任は私の関する処にない。坑夫が帰国の際には、風帆船はお断りする。汽船の上中下の値段を調べておいていただきたい。受け取るべき残金は下山した際に全部お渡し願ひたいので、別にヘーレン氏より借金をお願いしたい」

秋くれど衣やうすし立田娘 風になあてそおちの旅づれ

待てばうし待たねばあかず 古里の はや初雁のおとづるころ

弓取りの心去竹のヤウリ山 つらぬきとめぬ我がなみだかな

妹せん子に寄す

朝夕に我身に代わりめでてかし 只一本の老いのははき木

児女を思ふ

我宿のまねびの庭のなでしこは 時し違へず咲ききそふらむ

## アンデスを去る

七月一日、リマの田島へ出便。「貴君の調査を拝見し、また、日本へ戻す者の都合も打合せたいので、私の下山までは是非お待ち頂きたい。君の荷物は明日出す予定。吉田もご出発までには間に合わせるはず。小池も幾重にも君を守るつもりであるから、しかるべき行動を願う」等々。

ヘーレン氏へ出便。「小倉および勝村両氏に託された貴書、確かに受取りました。なぜ破綻するのかと日本へ問合せの件については、最初に日本より貴下へ宛てた電文を承知していませんので、理解に苦しんでいたところ、伴氏からの書状で分かりました。あれ以来、貴報に接するまで従前の通りにしておりました。破綻は実に残念至極であります、こうなった以上は、ただ善後策を講じる以外にないでしょう。田島はそちらのホテルにいるとのことですので、しかるべき御照会を頼みます」等々。

小池へ出便。「リマの事は高橋君より伴へ頼んであるため、カイヤオで療養したい旨も同意ではあるが、すべて伴へ伝えてあるので聞いてほしい。またヘーレン氏から『日本からの返電まで山でお待ち頂きたい』との頼みなので数日間待つが、帰朝の用意は今から始める。田島とはよく連絡を取ってほしい。万一脱走の様子があれば電報しろ。頼みごとがあるなら取計らう。小倉と勝村へよろしく願う」等々。

同二日、同三日、ヘーレン氏より来状。「結社は不調との決定につき、いよいよ本日より都合がつき次第、リマへ引き揚げるように」本日、残らず荷物を出し、明日四日、私と屋須は坑夫一同を引き連れて下山することに決する。ヤウリから医師のワレニチーンが来て別れを告げる。

伴から「田島はさる六月二十八日に脱走した。小倉と勝村も本月一日頃脱走したらしい」と知らせがある。

私はこの報に接し、田島の実に不埒ふちち千萬なことを憤る。なぜなら、私は会社のため、また本人のためと善後の処置をし、せめては立派に当国を引き揚げ、日本の体面を潰さないようにと陰となり日向となつて苦心し奔走しているのに、彼は全く顧みることなく無責任かつ不人情にも、跡は野となれ山となれと漫然と脱走したからである。

別れに際し、世話になった坑夫頭カマチョウはじめペルー人坑夫一同へ、ピスコ一樽（砂糖製火酒十二ソーレス）を与える。行李三十一個をリヤマ（ラクダに似た小さい動物、六十キロ位の荷を背負える）に背負わせ山を下る。

一夜、カーデナス氏と別れの盃を挙げる。彼はこの事業の不成立を嘆き、かつ別れを惜しんで私を抱いて号泣する。カーデナス氏はスペイン人で、現大統領が少数の兵を提げて一夜のうちにリマを占領していたチリの兵を囲み、遂にリマを回復して大統領になったその人の伝令使を勤めていた。現に少佐相当の人であるが、カラワクラ鉱山においては私と同じ任務で、彼はペルー人の坑夫を監督し、私は邦人を監督していた。そして互いに親しくなり兄弟のような交情があつたのである。彼は真に好人物であり、馬術の達人なことは前述の通り他に比類なき程のものである。私たちがペルーを去るに当たり、彼もまた職を辞して我らと同じ船で他へ向かった。

七月四日、午前九時半、一同はカラワクラ鉱山を引き揚げ、リマへ向かう。大関は山に残り、本人一身上のことについてヘーレン氏への伝言を頼まれる。

坑夫一同はチクラまで歩行できると考えていたが、歩けぬ者も出るかもしれないのでラバを調達しようとしたが、一頭につき九ソールとあまりに高価で見合わせる。そこで会社の馬二頭に代わり合つて乗ることを許可して下ることにする。しかし途中、数人が歩行できなくなり屋須の馬を貸して宿まで着く。その他はカサバルカに留まり、もはや歩けないと言いだした。一同の同意を得て来たにもかかわらず、今になって歩けないという苦情を受けるのは非常に遺憾であり、私は一同に諭してこう言った。

「この度のことを戦に例えれば、我らは負け軍である。それゆえ、万事について一同に満足を与えることは叶わない。だが、皆の苦勞は重々解つている。僅かではあるが、各自に一ソールとビール半ダースを慰勞として与えるので、これで勢いをつけ、いま一日だけの我慢であるから頑張つて歩こう」

そう伝えると、皆は心から喜んでまた歩行を開始してくれた。実は、限りある金で一行を連れ帰るのだから、決して予算外の金を使う余地はなかつたのだが。ようやくチクラの宿に着いてみると、前もつてカーデナスに頼んで用意をさせたはずにもかかわらず、夜具の用意はないという。驚いて急ぎ無理に調達する。屋須と鈴木は遅れたので、馬二頭を出して途中まで迎えに行かせる。彼らは他の坑夫ほど不服の様子ではない。私と屋須、カーデナスはホテルに泊まる。

同五日、午前七時チクラを出発。荷物は間に合わず、あとから送らせる。一同に昼食代四ソールを与える。しかしカーデナス等はこれを知らず、別に停車場で昼食を注文したのでまた分与する。午後四時を過ぎ、リマに着く。目立たないようにとのヘーレン氏の願いにより、一同を馬車でウエルタの本社へ送り込む。日本人は皆停車場まで迎えてくれた。

去安山 (読み・アンデスを去る)

忽焉脱虎穴 自若下山丘

虎子雖無得 全生以足酬

(読み) 忽焉こつたんとして虎穴を脱す

自若として山丘を下る

虎子を得ること無しといえども

全生以て酬むかいるに足る

注・忽焉：にわかに。突然

自若：平常心で

虎子：大切なもの

全生：みなな生命あること

リマで、本日までの成り行きをそれぞれから聞き取り、夜半過ぎに寝に就く。

その夜、行方知れずだった小倉と勝村が来て、日本へ一緒に連れ帰って欲しいという。私はまだ本社の話もへーレン氏としておらず、会計の都合もどうするべきか、もし連れ帰るとしても会社の金を流用する権利はないので良く考えた上で返事をしよう、と言って別れた。

同六日、へーレン氏が来て会談の予定だったが、来られないというので伴と屋須を連れて出向く。へーレン氏はソファに横たわり、ハンカチーフで顔を覆い、非常に愁嘆しゅうたんの様子で「誠に困ったことになった」というのみであった。私も気の毒に思い、鉱山を引き揚げた状況を一通り話して早々に去る。明日バソンブリオが来て経理を示す約束をする。

同七日、午前、伴とへーレン氏を訪れる。カーデナスが来ないために用をなせず、空しく去る。

同日、私が社室で伴その他三人とテーブルを囲み雑談をしていた時、突然後方のドアを開けへーレン氏が入ってきて、伴に向かって電報を投げ出した。

「これは誰が出したのですか。これは日本の言葉です！」  
と大変に立腹の様子であった。私は全く知らないという顔をしていたが、伴は非常に迷惑した様子で、「一向に知りません」と言う。へーレンは何の挨拶もせず怒って立ち去った。

実はこの電報は、私から高橋宛の暗号電信で、かの岡山という男に密かに出させたものであった。これがへーレンの手に渡ったということは、電信技手の不正行為か、あるいは岡山が既にへーレンに買収されていたのか：ますます四面はみな敵であり、容易ならざる形勢であることを覚悟した。この時には同行十七人中、私が心の内を話せる者は、大工職の久万勇六ただ一人であった。

さて、その後行方が全く分からない田島を探し出だすため、屋須と小池を連れてカイヤオへ行った。そこに滞在中の岡山をたずね詰問したが、何も知らないと言う。私は彼の様子にとても不審なものを感じたので、以前、彼に命じてチョリヤスから高橋へ出させた電報の受取書を提示しろと迫ったところ、家においてあるという。持って来いと言うと、しばらくして彼が差し出したものは、印章もない英文の受取書のようなものであった。私は、実際の証書ならば無論スペイン語であり、印章がないはずはないと思ひ、さらに厳しく、偽証だろうと問い詰めた。彼は真正のものだと答えはしたが、その顔色は泥のように変わった。私は、なお彼が悔悟して事実を自白することを希望すると伝え、かつ、ただちに田島の行方を発見して知らせるように、と言ひ含めて別れた。

同八日、へーレン氏を訪問する。しかしカーデナスが帰ってしまったため、また経理は出来ないという。

本日、また小池と久万をカイヤオへ遣わし、岡上に田島の行方を尋ねさせる。船舶出入簿を調べた結果、彼は確かに去る六月二十八日に出帆したということが遂に判明したのである。

本日、日本より「イツ出帆カ」と電報が来る。「今月中旬」と返電する。

## 事業失敗の原因

さて、今回の事業が失敗に帰した責任は主として誰にあるかという点、当鉱山を調査して買入れた田島技師と、当地で数年来鉱山事業に従事し、この買入れに首脳として斡旋したヘーレン氏とにあるのは公平なる認定であろう。

さかのぼって記すが、私がカラワクラの鉱石を調査してこの山に見込みがないことを高橋委員長に内報した時、高橋君は驚愕きょうがくの末、すぐに心を決めた。同じ時、ヘーレン氏はこの事業の破綻することを恐れ、「これは調査の誤りである」と憤慨した。田島技師は、問い詰めた高橋君の前に平身低頭して泣きすがり、

「実は、私は当山の内部は詳しく調査してないのです。それはヘーレン側の人たちが私に馳走して詳しい調査をさせてくれなかったためなのです。今更、誠に申し訳ありません」

と、ひたすら詫びを入れた。そのみの失策なのだと、甘々、なんとか責任を逃れようというつもりだったのであろう。

当の田島は脱走してしまい、更に詰問する方法はない。けれどもヘーレン氏は、

「山は決して悪くはありません。(これは、悪いと言えば更にこれを他人に売ることが叶わなくなるからである。田島さんが見て良いというから買ったのですから、私は知りません。全く田島さんが悪いのです」と主張した。そして、

「彼はコミッションを請求して誠にうるさくて困りました。山へ行けばその催促ができないものだから、足の痛みを口実にリマに滞在し、始終催促ばかりしていたのです」という。私は事実を吐かせて本国への土産にしようと思ったので、

「それはさぞお困りでしたでしょう。それでは田島はいかほどコミッションを貰いましたか」と応じた。彼は、「実は最初に山を買う時に、これは良い山だと言って買ひそうにしながら、なかなか決断しないで困りました。

私は是非ともこの事業を成立させたいと思っており、つまり彼はコミッションを欲しいから確答しないのだろうと、遂に歩合をやることを取り決めたのです。本人に渡した金額は、全部で二万八千円ほどです。その当時、ピエドラが『日本側ばかりが歩合をとるのは不公平である』というので、彼にも同様にやることにしたので」と話した。

「よく解りました。それでは私が日本へ帰り、決してあなたに無理はない、全く田島が悪かったのだという事を証明したいと思えます。が、ただ口上のみでは信用しかねるかも知れませんが、何卒その大意および金額等を書面に認めて下さいませんか」と言うと、彼は承諾し、証書を作って渡してくれた。

ピエドラのコミッションの件については、後に彼は「私の名で貰ったけれども、金額ヘーレンさんに戻した」と言った。

同九日、午前十時、伴、屋須、カーデナスと共にヘーレン氏宅に会合し経理をする。ヤウリ騒動の一件についての勘定は合意決定せず。

無端一夜夢刀頭 漫載羈愁在客舟

白露清風秋万里 天边那处是皇州



(読み) 端無くも一夜刀頭を夢見る

注・刀頭：故郷に帰還する

漫く羈愁きしゅうを載するは客舟きやくしゆに在り

羈愁：旅の愁い

白露の清風秋万里

天辺：空の果て

天辺那処是皇州なりや

那処：那边。いずこに

同十日、坑夫等の荷物がすべて山より着く。伴と汽船会社へ行き、来る十五日に出帆と定め、横浜までの切符を予約する。汽船はランタロー号、船長はドンゴールである。

同十一日、一同へ給料を渡す。

同十二日、青木、傷がほぼ回復し初めて病院から訪ねてくる。ヘーレン氏からすべての勘定差引金を受け取る。もつとも、この青木の入院費については大変面倒な談判があった。

会社の庭園をめぐりて

常磐木も花の色香もうつろへぬ ウェルタの庭の秋の夕暮れ

## 乗船、帰途につく

七月十三日、当初高橋君が日本から持参した土産物の残り全部を屋須に渡す。金額にすると二百五十一円余りであった。

同十四日、ロンドン銀行へ行き、七百五十ポンドを受領。(一ポンドは六十ソールレス三十七セントボ)

南米汽船会社出張所で、パナマまで三人分の上等切符(注・屋須、小倉、勝村か)、日本まで二人分の上等切符(注・山口、小池)と坑夫十六人分の下等切符を買う。金額は三千九百八十八ソールレス八十セントボである。小倉と勝村氏も同行する。船賃は右の内に立替える。

同十六日、東京の藤村紫朗宛てに「アス一同出帆ス ヤマグチ」と電報する。

ヘーレン氏へ別れの挨拶に行く。彼は、「誠に不快なので社員へ書状を出さないが、よろしく頼む」と言う。また「もし、坑夫の中に一人でも残りたい者があれば残してくれ」との申し出を受けていたので皆に相談したが、留まりたい者はいない。私もまた望まない。

同十七日、午前七時、一同ウェルタの本社を出発する。荷物は五十四個でカイヤオまでの運賃は七十八ソール。これはみな伴の取計らいに任せたものだ。

七月十七日午後零時十五分、ペルー国カイヤオ港を出港する。この一行には小倉と勝村のほか、以前からヘーレンが雇っていた庭師の松本辰五郎をも連れて帰る。

半年の夢は白露 初日の出

整頓一行去白露国

振衣安嶺白雲頭 洗足里河碧水流

十八男児揮首去 胸襟快闊月明舟

(読み) 衣を振る、安嶺アンデスの白雲の頭へ

注・振衣：世塵を払う

足を里河に洗えば碧水流る

十八人の男児首を揮って去る

胸襟は快闊にして月は舟に明るし

同十八日、「もはや慣れていいるから、帰りの航海では手荷物は自分のそばに置く方が便利」というので各人に渡す。ところが、坑夫の萩原豊次が昨夜、荷物を盗まれた。船長へ届け出て探したところ、炭部屋から多くのものが見つかる。青木を船医に診察させる。午後二時二十分、サラヴェリー港（ペルー）に留まる。

同十九日、午後二時バイタ港（ペルー）に止まる。

同二十日、正午グワヤキール港（エクアドル）に泊まる。「東洋人は一切上陸を許さず」というので、一同怒り叫ぶ。

同二十一日、昨夜田口がまた手荷物を盗まれる。明細書を作り、船長に訴える。

同二十二日、昨夜、平向がまた手荷物を盗まれる。彼らは、自分の枕にしている荷物を取られたのにも全く気が付かず、その厄介さ加減にどうしてかと驚かざるを得ない。

同二十三日、午後十一時半パナマ港に入る。

同二十四日、午前六時、小蒸気船で上陸する。小池、屋須と共に例のグラランド・ホテルに宿をとり、他は皆イタリア・ホテルに宿泊させる。

同二十五日、伴へ礼状を出す。高橋君へ「田島イッタ ニガスナ」と電報する。

同二十六日、小池、屋須、久万と共に、パナマ運河の旧工場を一覧するため汽車で行く。工場および社宅などは荒廃しており、運河の入口には小汽船が沈没したまま遺棄してある。途中に中国人の墳墓が数百もある。先年来の工事で落命した工夫たちの葬地であるという。

同二十七日、二十八日、太平洋汽船会社へ行き切符を引替え、かつ屋須のためにグアテマラまでの切符を買う。八十ドル。屋須はグアテマラに旧住所があり、妻もあるため当地に留まるのである。

同二十九日、小池、久万と共に馬車であちこちを見学する。

同三十一日、正午、荷物を船に積み、午後二時コリマ号に乗り込む。同五時、サンフランシスコへ向かって錨を上げる。ここに至って、ほとんど家郷に近くなった思いがする。

八月一日、朝に雨が降り清涼を覚える。夜、大雷雨がある。

四日、午前五時、エルサルバドルのラ・リベルタ港に着く。この地は現在戦争のため騒がしいという。ここでは今、太陽が真南の天頂を通る。午後零時四十五分、出航する。

同六日、午前五時、グアテマラのサンホセ港に着く。小池は屋須を棧橋まで送って帰ってきたがコースト・フイバーに罹り、急に高熱を出し非常に苦しむ。船医に託す。

船に乗り込んできた英国人夫婦が、「私はこの地にコーヒー畑を持つものだが、当国の労働者は実に怠惰で困る。そこで貴国人を雇いたいと思うのだが、いかがであるうか」と言ってきた。試みにその手当を聞くと、一人一月二十ドル位と言う。私は、「この度は一応帰国しなければならぬので」と、話を進めはしなかった。

長尾秋水『松前城下の作』に寄せて同じ脚韻を用いて詩を作る。

(注・長尾秋水の詩

海城寒柝月生潮

波際連檣影動揺

従此五千三百里

北辰直下建銅標)

跋涉高山兼大潮 変遷雖極志何揺

既看破日南珠去 欲訪北辰星下標

(読み) 高山を跋涉し大潮を兼ね

変遷は極まるといえども志何ぞ揺るがらん

既に日南の珠を看破して去る

北辰星下の標を訪ねんと欲す

(意訳) 高い山を歩きまわり、一方海では大潮を経験する

ペルーでの事業は変遷を極めたが、その志は全く揺るがない

尽く南方の遠い地の美しく見えるものの真実の姿を見抜いて去る

北極星の下の(秋水の詩にある北海道の)標を訪ねたいと思う

同七日、午前五時、チャンペリコ港に着く。ここもグアテマラ領で戦争中だが、様子は更に分からない。昼に抜錨する。

太平に今日も寢食の士族かな

孤雲 (注・慎の号)

支度の鐘に不意を打たれて

久万

同九日、午前五時、メキシコのアカプルコ港に着く。私は上陸し、サンフランシスコの日本領事館の三宅宛てに電報を出す。「コウフ十七 例ノ宿周旋ネガウ ヤマグチ」

同十一日、マサトランに泊る。メキシコ領でカリフォルニア湾の入り口である。人口二万五千人、鉱山が大分あるようだ。

同十三日、午後六時抜錨。

同十四日より十九日、日々長いカリフォルニア沿岸を航行する。

同二十日、午前九時、サンフランシスコ港に到着。小池と小頭等を従え、コスモポリタン・ホテルに宿す。坑夫等十三人はメーソン・ストリートの日本人の家に宿泊させる。領事の川北氏を訪れ、謝礼を述べる。

同二十一日、東京の藤村紫朗あてに電報を出す。「ペキン号ニテアス出帆ス ヤマグチ」

同二十二日、ロンドン銀行へ行き、五十ポンドを二百四十ドルに両替する。午後一時、いよいよ日本へ向け抜錨する。

同二十三日、二十四日、行程二〇五浬（注・約380km、一浬は1852m）

同二十五日、二八四浬

同二十六日、三〇〇浬

同二十七日、二七八浬

同二十八日、二六八浬

同二十九日、二八四浬

同三十日、二八八浬

同三十一日、二四六浬

九月一日、二四二浬

同二日、本日一日を失う。

同三日、二五二浬

### 六旬航路意悠々 又被西風吹敝裘

#### 賓雁弄声秋万里 一鈎新月懸橋頭

（読み）六旬航路、意悠々たり

注・敝裘：破れた服

又西風に敝裘を吹かる

賓雁：並んで飛ぶ雁

賓雁の弄声秋万里

橋：帆柱

一鈎の新月、橋頭に懸かる

故郷にかざらば飾れ から錦 身の墨染めをかくしやはする

故郷に飾る錦はあらねども 赤き心は知る人ぞ知る

同四日、行程二七二浬

海原や過ぎて跡なし雨の脚

同五日、二八六浬

涉世為形役 浮沈紅埃中  
壮心常落々 雲外御高風

(読み) 世を渉るは形役と為す

注・形役：肉体に使役される

浮沈は紅埃こうあいの中にあり

紅埃：世の煩わしい事柄

壮心は常に落々たり

落々：心大きく、こだわらない

雲外に高風を御す

高風：優れた人柄。高尚な風格

同六日、三〇四湮

同七日、二八六湮

同八日、三〇二湮

同九日、二九九湮。一同へビールとりんごを与え、僅かながら航海中の労を慰める。道中の決算をする。

## 帰国

明治二十三年（一八九〇）九月十日、午前八時、横浜港に到着する。高橋是清、高橋長秋、相馬与太郎（旧上田藩士で藤村氏の経理係）、井上賢吉氏（このペルー行きの前にヘーレン氏の使いとして帰朝していた）等が一行を迎える。午後四時二十分の汽車で東京へ戻り帰宅する。坑夫一同は新橋の蓬萊屋に宿泊させる。私は高橋是清君と談話を尽くす。

ここで私が驚いたのは、日秘鉱業会社が、我らの帰国をも待たず既に解散していたという事である。私は今回、ペルーにおける悲運に際して、一意に会社のために善後策を講じて、一行の始末および金銭の節約などに至るまで充分の注意を払ってきた。無智横暴なる坑夫らが途中で金銭などを請求してきても元より余分の金もなく、かつ高橋委員長の言い置きもあったことから、これを断りまたは諭して、「帰国したら必ず相当の慰労金を請求して与えるから、道中は辛抱してくれ」と申し聞かせてきた。

遂に滞りなく一行を連れ帰って会社に引き渡そうとすれば、既に会社は解散しており、一同に相当の手当てをやりたくとも、もはや金銭の出所もないと云う有様である。実にあきれ果てた次第である。このままにしておくことはできず、会社の残留員の頼みで私に与えられた給料をひとまず坑夫一同に分与し、不服ではある彼等を帰郷させたのであった。私は実に、堂々たる日本の紳士紳商、政財界の名士と言われる人々の不徳無情であることに慨嘆した。

これについて思い返せば、帰路パナマで小池は私にこう言ったのである。

「山口さん、あなたはそうやって正直に会社のためにと儉約しておられるが、鉱山などをやる人は薄情なもので、よく後始末をしてきてくれたと思う者はありませんから、それよりはここで、一同に金をやって喜ばせた方が上策ですよ」私は笑って、

「それはそうかもしれないが、たとえ会社の人たちが薄情だろうが、僕には僕の主義というものがあるから、それを曲げることはできないよ」と言ったことがある。しかし、今日に至ってみれば果たして小池の言った通りになっており、何とも申し訳ない次第である。

九月十一日、日本橋区柳屋で旧会社員たちと会い、白露事変の大略を陳述する。

同十二日、旧社員有志に招かれ、私と小池は上野の桜雲台へ行く。出席者は、三浦梧楼、高橋是清、高橋長秋、高田慎蔵、藤浪忠言氏等数人であった。

この時、藤村紫朗が原告となり、技師・田島晴雄に対し、ペルー国における詐欺取財の訴えを起すことに決まる。(注・その後田島に対し、三年半の懲役刑と損害賠償の判決が下った。)

同十九日、高橋長秋へペルーの会計帳簿三冊を提出する。

同二十一日、両高橋氏へ道中日記ならびに諸書類を提出する。

同三十日、ペルーの伴龍氏へ出便。従来の札を述べ、ヘーレン氏ならびに株主のために田島技師を訴えることになったので証拠物となる書類を送ってほしいと頼む。また、大関の身上についても頼む。

カーデナスとヤウリの医師へも礼状を書き送る。

十月一日、高橋長秋へ、坑夫田口のピストルを渡す。

「右にて旧日秘鉱業会社の残務もほとんど終結を告げたるに付き、しかる紅塵（注・世の煩いこと）の中を避けて、いよいよ北海道に赴き、淡泊に余生を送らんと欲し、同月十四日をもって遠征の途に上れり」  
(原文より)

朝日影さす甲斐もなく消えうせて うらみを残す白露の因

(完)

「」のように山口慎がやっこの思いで一八九〇（明治二十三）年にペルーから帰国してみると、「日秘鉱業会社」が解散していた上に、順調であったはずの自らの「清水谷商会」が大変なことになっていました。留守中の使用人による放漫な経営や使い込みによって遂に不渡りを出し、倒産となってしまったのです。このペルー銀山開発事業の失敗は国の恥辱とみなされ、その後関係者は口を閉ざしますが、慎は帰国後すぐ自らの秘露日記を清書し、ペルー銀山事件の顛末を『白露日記』と題して残したのでした。

『高橋是清自伝』（上塚司編、中央公論社）の中で、是清はペルー事件の詳細のほか、「忘れ得ぬ人 山口慎君のこと」と題して語っています。それによるとその後の慎は、札幌でアメリカ製農機具の輸入販売代理店を経営し時流に乗り繁盛しますが、火事にあつたため、妻の弟・友常毅ともつね三郎を頼つて神戸へと移ります。そこで外国商館の販売担当や、なんと鰻屋「東京庵」をやつてみたり、神戸棧橋会社で支配人とはいえ重労働をしたり、職を転々としました。心配した是清によつて安田善次郎やすだぜんじろう翁に推薦され、その人柄を見込まれてようやく活躍の場を得ます。まず東京・本所の安田製釘所（現・安田工業）、そして北海道製麻会社（現・帝国繊維）を経て、安田銀行（現・みずほ銀行）の根室支店長に抜擢されます。

ところが、順調にいった一九一二（明治四五）年、突然、旧上田藩主・松平家より「財政困窮につき大改革が必要、お前より他にやれる人はいないから是非とも力を貸してほしい」と懇願じんごぎされます。慎は「情誼上断るわけにはいかない」と潔く安田銀行を辞めて東京の松平家へ戻つたのです。慎の心には、留学に随行した松平忠厚の不帰国の件に対する責任感も生涯残つていたのでしょう。私財をも投入して、山口家が代々仕えてきた「おいえ」のためにと尽くしましたが、病に倒れ、翌一九一三（大正二）年、胃潰瘍と十二指腸癌のため亡くなりました。六十七才、まことに波乱万丈の生涯でした。

慎の死後二十数年経ても、是清は「ああ、山口がいたらばと折にふれて思い浮かぶ。立派な人間はなかなか世に少ないものだ」との言葉を先の自伝に残しています。

慎の長男で明治十二年生まれの固かたしは、実家が倒産したため商業学校を卒業後すぐ、是清のすすめで横浜正金銀行（後の東京銀行）に入行します。最初の赴任地はアメリカで、計十八年にわたりアメリカ各地で勤務しました。是清の欧米視察の折には現地でも随行もしたようです。慎が倒れたとの知らせに急ぎ帰国しますが、長引く病に、是清から「あとは私に任せてアメリカに戻るように。万一の時にも私が取り仕切るから、帰国しなくてよい。心配するな」と諭されたといいます。当時、まだ太平洋横断は船、陸路は鉄道で往復に大変な時間がかつたのです。その言葉通り、慎が亡くなった時には大蔵大臣・高橋是清として葬儀委員長となり、全てを取り計らってくれました。是清を時には「おやじさん」と呼んで慕い、ようやく仕事を終えて帰国した固は、終生感謝を口にしていたと、妻・良子は子どもたちに語っています。ですから一九三六（昭和十一）年、二・二六事件では是清が暗殺された時の固一家の悲嘆は非常に大きいものでした。

慎亡き後、『白露日記』の原本と、是清をカイヤオ港で見送った際に詠んだ漢詩(620)の掛け軸は固により大切に保管されました。固は一九四一年、太平洋戦争が始まる直前に病没しましたが、その遺志を継いだ妻・良子が、戦争中は防空壕に避難する度に持ち出して守り、家は全焼してしまいましたが、日記と掛け軸は無事戦火をくぐり抜けました。

その後、『白露日記』は固の次女・香代子の嫁ぎ先の金子家の金庫に保管されることになるのですが、これは固の長男・裕ゆたかのブリヂストンでの海外勤務が長かったためかもしれません。金子香代子は二〇〇〇年から山口家の先祖について調べ始め、「祖父・山口慎」としてまとめました。二〇〇六年出版の『没落家族のゴールデン・デイズ』(文芸社)にも詳しく綴っています。香代子は二〇一一年に亡くなりましたが、生前より託されていたので『白露日記』は長女の私が引き継ぎました。墨の文字は実に美しく、丁寧な楷書で書かれています。しかし、百二十年以上前の原稿用紙に書かれた原文は句読点もない旧漢字の文語文です。全く古文の素養のない身にはとても読みづらく、これ以上傷めぬように宝物として大事にしまっておりました。

そして二〇一四年、三井金属株式会社・ペルー支社長を務めた五味篤氏が『銀嶺のアンデス―高橋是清のペルー銀山投資の足跡』という大著をスペイン語と日本語の併記で出版され、山口慎を主要な人物の一人として取り上げて下さいました。『白露日記』と共に母の著作も資料として引用されていることを知り、私はてずりつつ初めて原文を読み通して、大きな感動と共に今まで実情を知らずにいたことに愕然とし、申し訳ない思いでいっぱいになりました。曾祖父が志を持って赴いた一大事業のペルー銀山開拓、結果が失敗に終わったとはいえ、その命がけの事実が社会からまるで葬り去られようとしていることには忸怩しきじたる思いがあつたことでしょう。この事実を残そうと、精魂を込めて清書したのが『白露日記』だったのです。その渾身の作品を子孫がほとんど誰も読めないとは、何と残念なことでしょう。日記の書かれた当時は近代日本を建国することに大急ぎの時代、その後も激動の年月の中にこの日記が埋もれてしまったのも致し方ないとは思いますが。しかし、高橋是清が後に記し、このたびは五味篤氏が詳細を明らかにして下さったように、この計画は近代国家へ踏み出そうとする日本の対外事業の先駆をなしたといってもよいものでした。

日記の前半は冒険譚としても面白く、せめて慎の血を引く子孫には読める形にしなくては先祖に申し訳ないと思ひ、現代語訳に挑むことに致しました。昨年は明治維新から一五〇年、何かと明治時代が見直されていることもきっかけとなりました。後の世代にも読んでもらえるよう読み易さを第一に、けれども原文の言葉の美しさも生かしたく、今は使わない熟語でも意味が推測できそうなものはそのままにしました。慎が詠んだ多くの短歌と漢詩には心情がよく表れていると思ひます。漢詩については、慎の孫で元青山学院女子短期大学教授の出雲朝子氏(六男・弘道の長女)に依頼し、読み下し文と意訳を付けていただきました。その漢詩の多くは七言絶句で、起承転結の四句の起句、承句、結句で韻を踏んでいます。

山口慎の五男である三村起一みむらきいち(一八八七年―一九七二年)は生後すぐに慎の妹・由ゆ(旧上田藩士の三村家に嫁ぐ)の養子になり、のちに住友鉱業初代社長、石油開発公団初代総裁などを歴任しました。一九六二年に出版した『身辺二話』に、日本経済新聞に連載された「私の履歴書」とともに、『白露日記』を翻刻し見出しを付けた「秘露日記」を収めました。三村家は金子家とも関わりがあり、気さくな大叔父大叔母に私もよく可愛がられた思い



出があります。原文にはない「見出し」は懐かしいこの大叔父に敬意を表して、この現代語訳の目次にほとんどそのまま使用いたしました。

末筆になりましたが、五味篤氏には、ペルー銀山事件の全貌を明らかにし、曾祖父の日記に光を当てて掘り起こしてくださったこと、そしてこの現代語訳に際し『銀嶺のアンデス―高橋是清のペルー銀山投資の足跡』を参考にさせていただくことにご快諾くださいましたことに心より厚く感謝申し上げます。

二〇一九年四月

上野真理子

## 〈追記〉

二〇二〇年に判明したのですが、一九五七年の中央公論十月号に村山兵衛が『海外雄飛の夢を弔う―明治中期の海外事業における資本家と労働者の人間的スケッチ』を発表し、『高橋是清自伝』に山口慎という人物が出てくる。最近本人の手になる『秘露日記』が発見された…とこの日記の詳細を描いていました。

また、最近になって諸処で山口慎に興味を持つ方がいらしたため、二〇二二年四月に私がウィキペディアに「山口慎」の人物伝を投稿しました。心ある方々によって修正・改善していただいております、合わせてご覧いただければ幸いです。サイトは <https://ja.wikipedia.org/wiki/山口慎> です。

二〇二二年五月

## 〈追記二〉

『白露日記』の肉筆原本は昨年、国立国会図書館のデジタルコレクションに納入、また「信州上田のデジタルマップ」のサイトでもご覧いただけます。

三年以上のコロナ禍が明けた二〇二三年五月、五味篤氏の労により、高橋是清の孫・井上泰氏と、「週刊エコノミスト」での四年半に渡る『小説 高橋是清』の長期連載を終えられた板谷敏彦氏とに初めてお会いすることができました。板谷氏の連載でも山口慎を予想以上に多く取り上げていただき御礼申し上げます。この夏から三冊の単行本として出版されるそうです。

近年に分かったことですが、山口慎の縁戚が高橋是清家の子孫と結婚しており、また是清家の子孫は安田善次郎翁の親戚であり、多くの御縁の繋がりに驚きつつ、時間が縦と横へ広がっていく感慨を味わっております。

今回「現代語訳」を少し見やすく改訂致しましたが、まだ拙い点はどうかお許しください。

二〇二三年五月